和訓栞

底登之部

十七至十八

津田文庫
文庫1
1604
17

早稲田大学図書館蔵書

倭訓栞前編十七

洞津 谷川士清 纂

底の部

て

助語にいふハ万葉集に而字をよめり字書に而ハ兼上起下之辞又因是之辞とみえ
也○てをてとよめる歌ハ必上句へかゝる意旨へにてもしとも同し又やすやまて
けふらたまたてあらハ東こそ清の語意也○濁るハすの濁音のよし見あるで秋のくるぐ
おもほえで今ちらんれでさえてでうつろふものハ比類之濁れバ過去の辞之清めバ現在の
辞婉捨山にてる月をみての類之文しての略なるあり古事記にたらなれもいまだとらずて
万葉集に妹にあハむとての類也○てと添る語をのべたるもあり思ひそめてきといひそめ
妃之見てしらでしらなくへもてくんハ果ん也近世の詞にてもといふべきあるをつとよむ事あ
し語之清くといふへきをてといふんハよしてといふへきをつくといひくし○手ハ出之
といへり指をもよめり○出をよむハ濁れりでるの略也○字迹を手といふ中源氏物
語よくしたり漢書に天子識其手注に手ハ謂所書手跡とみえたり今もよく留るに
あていへりよて日本紀万葉集に書字をてとよめり○手を清けくいふ詞多し

つだ文庫

010190597321

稲ﾉ奥ﾉ中ﾉといひ又ﾉ長ﾉ行手縄ﾉの類之傳の略ﾉて相接たるといふ辞之𠃌て
ものﾉ顒をいふﾉ何てと称するハ様字の意之○代ﾉとよむハ日本紀ﾉ見えて直とよむハ
万葉集ﾉ見えてさらあての略く一説ﾉ代ハ呉音之耐をてとよむもほし鶴林玉露ﾉ
争と分直と書たまへハ是も呉音なるへしといへり○豊をよむハ豊鴻の類とよの急語
なり色し○幣をよむハ和幣をにぎてとよむ是なりたへて又神ﾉ奉るより幣の
字をよめるなるへし○春秋ﾉ星隕如雨と戦国策注ﾉ而猶如鶴林玉露ﾉ春秋経及
欧陽公集古録東坡古鏡録式引て如字訓而と如と而と音相通すといへハなり○古書
ﾉ帝もての假名とせえ

△てあて　手當の義目當をいふ也し

△でい　兒女の父をてまといふ禰の音也といへり禰ハ泥の上声なり也称いてと呼ハ重き音
也されと爹の重音なるへし○金銀なとてにいふハ泥の音也皇明文則ﾉ宣徳間嘗
遣人至倭国傳泥金畫漆之法以歸と見ゆ

でいり　俗ﾉ出入ありといふハ事ある𨻶といふ三代実録ﾉ既遣教使推問辞紀若有出
入国有恒典と見えたり

△でう　拾芥鈔田籍部ﾉ卅六町為一里里起西行于東此六里為條々起従北行于南とみえ
たり諸国の諸郡郷の名ﾉ條といふハ此義ﾉ出所謂東條西條中條の類也

てうつ　古事記ﾉ一言主大神手打受其捧物と見えたハ拝の事之齋宮式ﾉ神宮
司執髮木綿入外玉垣門而跪命婦出受以奉齋王拍手而執着髮とみえ集韻ﾉ今
倭人拝以両手相撃蓋古之遺法也といへり

てうどかけ　大嘗會記ﾉ瀧口調度懸十人とみえ弘安禮節ﾉ調度懸ハ弓六張矢六手と
見えたり調度ハもと諸道具の事なるを弓矢の事ﾉもいへるハ君のおもの調度
なりしの具なるをもて之懸ハ其役をほとむるよりいふ詞之ﾉて枕草紙ﾉ調度を負
てといひ東鑑ﾉ懸御調度ともいへり布衣記ﾉ主人矢を負弓を持まつし
調度懸是を持と見えて重職なるのよしも東鑑ﾉ見え文実朝公の語ﾉ故将軍有制自
非発二十矢擬二十人者不得與此選と見えてたり弘安礼節小調度懸といふともあらふか
からしくハ神代紀通證ﾉしるせり○後漢書の注ﾉ度音大各反といへハたくの音
なるへけれど古へよりどの音によめり○一説ﾉでうづかけと讀を故実とす烏帽子懸
の時ハ音定とよむなり御車のそばﾉ持行具ﾉ五色の打緒綾錦の紐をかけて結付

かるとぞ見て調度懸緒の義之武家にてハ弓の事にあづかりつかさどるなり故に後世御
弓の衆といふハ昔の調度懸の役人也
てうしがしハ　延喜式に調子拍二合とミえ楽器を納る箱なるべしといへり
△てえ
△てをやく　四十二章経に愛欲人猶執炬逆風而行必有焼手之患とミえたり
てをつくる　日本紀に拱手をよめり源氏にもてをつくりて額にあてゝつゐたてまつ
るとみえたりこハおがむさまをいへり
てをゝりて　折手の義屈指をいふ也万葉集に指折と出てさしをりて伊勢物語源氏
にもみゆ
てをゆるす　囲碁にいへり枕草紙にもてをゆるしたまはんやとみえ源氏物語に
あいきやうくもてをゆるせりしすゑを君にまかせらるゝ事ともありき
△てがた　券契をいふ票も同じ黄山谷云豈細民棄妻手取子不然則今婢券不能
画指節今江南田宅券亦用手摹也と見え曲選に丈休書上手摸印又五個指頭
那裏四個指頭的是休書ともあり又戸令に若不解書画指為

記をゝもみゆ又ひとさし指に墨をぬりて指紋を印すとも證とする也といへりされハ手の
形を押して印するにもいふ成べし又爪判といふ事あり女ハ右手ひとさしゆびの爪に墨をつけ
て押也ともいへり○車に手形あり平家物語に見えたり鞍に手形あるハ悪源太
が鎌田に教へしより始るよし平家物語に見えたり
てかき　日本紀に書をよめり書生書博士などをもいふよし庭訓にも書と見えたり徒然
草にも手かく事といへり○後拾遺集に
雲井にていかであふぎと思ひしにてかくべしとはおもはざりしか
書よみ搔をそへたるの搔ハあさましくおぼつかなきふるまひなりや
てがし　日本紀に柷械をあしかしてがしとよめりされど柷ハてがし械ハあしがしなり
柷ハ櫃と一物なるよし爾雅にみえたりさまハかしの木もて此物を造れるなるべく
今いふ手がせ是にてかせあしかせともいへり○ひろしハ唐令に盤枷とかき
△てぎ　手木の義千手ともいふ
△てぐつ　刑具にいふ梏也○あしぐつハ桎也
てぐるま　和名抄に輦をよめり手車の義也朝野群載に輦輿とも見え親範記に輦

通の車なりハちひさくてとみのとき長き車に於れとも輪ともろくみえて六府の官人かならて出入すといへり○輦車の宣下あるハ宮て大内を出入すと延喜式に夫人及親王ハ後涼殿のうしろを限るとみえたり年中行事哥合に

雲井にもさいろぐる手車や君にひくるしるしなるらん

でくるぼう　傀儡をよめり筐の中よりいだし来るの義にや豊前武蔵相摸安房総なとにてくれぼう豊後にてでんがう中国にてきのぼうといふ西国にてでくといふ一休和尚の歌とて

世の中ハ人ハでくるぼうあやつりてすゝしまんセハ後ハがつさう

梁鍠が傀儡棚の詩に須臾弄罷寂無事還似人生一夢中といへるも是也

△てけ　土佐日記にみえ天気の急浩なり

△てこ　木挺或ハ木槓をよめり或ハ手木ともいへり又鉄挺（カナテコ）擶挺（カシテコ）なといへり○万葉集に手児といへるハ下のてこなに同し一説に弟子なりといふハてこの義也古事記に兄子（セコ）弟子（テコ）をあへいへりとて武蔵下総にて末子をいふ南都にてすてこといふ○備中のいやしき俗語に強てといふべきの詞にてこといへり

てこな　万葉集に勝牡鹿（カツシカ）の真間の手児名といへり東国の俗女の美なるものを称していへり江戸にも胡那明神の祠あり○奥州津軽の邊にて蝶をてこなといふも其虫愛すへき名とそおもはるゝなるへし

てころ　てこなと同し詞にや拾遺集に

さゝ波や志賀のてころかまかりふし川瀬の水をたえすかも　かのうちる池邊に立るそが菊のなけとさへのまれてころさ

てらさと照添の義と釈せりと可愛の義なるへし

てごたへ　手應の義擩字韻会に射中物声と注せるによく協なり

△てさ

△てし　思ひてしハ思ひさらしちるひてしへ誓ましせさらぬるなるにて将しるなり○万葉集に義之とよめり手跡の聖なれハなるへし

てした　呉志に手下兵多と見えたり

△でと　銭司とよめり山城相楽郡の里也貞観中に鑄銭司ありし所也

てまき　日本紀に手鈴とも西土にも金鈴を臂に繫しまた臂環に鈴と

も用ゐらるなるべし

てもさび　手慰の義也といへりてもさびの池といふハ名ばかり残るべし

△てせ

△てそゞり　俗語也手慰の意にいへり

△てだて　方便を訓せり太平記に手段ともかけり○歩楯をも訓せり和名鈔に見え

◯日本紀に手に皮楯を執し事見えたり手牌も同し○碁にいふハ史に博弈道と見えたり

てたま　手足の義成べしなまたらわと反對也尤名鈔盛衰記なとには手たらと出り

△てらぐく　俠洛也手違の義也

△てづく　紫式部日記無名抄などに見えたる手筒のごとくなるらん意也宇治拾遺に口てづゝもなくとあり今人專女工の精しからぬにいへり日記に一といふ文字をだに書わたし侍らずいとてづつにあさましく侍り○てづゝ山ハ越前也

てつぶひ　今昔物語家持集にも見ゆ手傳なるべしてつだふともいへり迭代の音といふハいかゞ

てづくり　新撰字鏡に紵をよミ霊異記に黄葺をよめり和名抄に白絲布をてづくりのぬのとよミて朝野群載に手作布とも見え又さ也手の御調の義日本紀に女手末之調とよめる意なるべし或ハ調布とよめり万葉集に

玉川にさらす手づくりさらさらになにそこの子のここだかなしき

拾遺集に下の句昔の人の恋しきやなぞといはれもせめ○後三年軍記にみちの国にはてづくりもまだ代ハなつらにとあんいふあるとみえたり

てづから　手親らをよめり又みづからの転なりといふめかし東鑑に手自とかけり

△てゝ　万葉集栄花物語紫式部日記などに見えたり父の俗語也ちちと通す或ハ爹乃唐音てまいの訛なといへり○俗にてこなともいふ大鏡に見えたり西国にててらといひ大和にてわんのことなといふ肥前佐賀にては別當といふ○物語に夫の事をててといへるもあり南勢にて下男をも呼り○小児詞に手をもいへり○神宮のあたりの俗父をてゝ母をやゝといふ

でく　出で代万葉集よりかくよみならへるを略せし也

てくま　和名抄に罠をよめり網鳥の媒をいへり○綴の俗語にてもいへり或ハ禪と

よめり今加賀人ハ襦袢をてとらといふとも云り

△てとら　俗語之手操の義てとらこともいへり○手抹釜といふハ提梁釜也といへり

△てなみ　本事手段なき紙譯せり或ハ手暗とせり為業の欵なきをよめり

△てなが　手長とせり今いふてつだひの人也○手長足長といふハ荒海障子及神輿

此水引なとに異人状書あり○豊前なとに村里の名につけて呼ハ庄といふなるへし

△てならひ　書学をいへりと見えて源氏物語の名に見ゆ鳥字も同し古今集の序に難波津をこゝにもてくし

浅香山の哥をてならふ人の始にもなるといへり源氏にもまゝ難波津をてならひくし

く詠け侍らねといへり○てならひの小冊ハ字治にあり

△てには　てにをはの略也俗にてにをはのたがひなといふを哥にてにはを

ので聞えぬよりの事也西土にていふ助語辭也

△てね　八代集中に一首見えたりてにをは後撰集に

かくばかりちるにつけても世をやは誰しでね花のかげなるものとしるべく

此でいふもんとも見えたりまちでんゆきてに待てに惑ひなすに同しく世を空に惑ふ

くさらぬ世を詠しせといふ意なり

△て孫

△てのあや　新撰字鏡和名抄に腡をよめり今手れきらじといふ手掌の文脈也左傳に出

△てのうら　貫之集に見ゆ掌をいふ俗にてのうらかへすといふハ反掌の義く

△では　耕なとにいふハ出端の義成へし上場也○出羽の国を今ではといへり

△てびと　日本紀に才伎又工匠をよめり手技ある人をいふ記に手人部とも見ゆ万葉

集に伎人もよめり日本紀にハ伎人をてびとと訓ぜり業ある人をいふ古事記に人手

韓鍛とあるもてびとゝよむへし手ハ上手をいへり○伎人郷ハ河内にあり

△てふ　哥に何てふとよめるハ何といふ義なり万葉集に云字をよめりといへり又ちとよ

てますく或ハちふとも云ふどもよめりをせハ皆ちふなるを弘仁以後にてふと轉せるな

らむとも云り今も上総の俗ちふかはりてちふといふとぞ○中世以後の哥にハてふの詞を

るといふ意に用ひたるもあめりといへりされと伊勢物語に世のうき事もや空にあって

ふと為りら○古今集の序大井川和哥亭子院哥合の日記土佐日記源氏物語栄花

物語なとにてふとかきたる事あまれハ歌の句調の約言にのみある辭なるへしともいへり

されと竹取物語にかくや姫てふ大盗とみえたり○蝶状によむハ音なり相模下野陸奥に

てふは津軽にてはまべ又てこ秋田にてしらこ越後にてはまべつるら信濃にてあまびらといひかひこのてふは蛾なり信濃陸奥上野にひゝるといふ西国にてひゝろといひ伊勢にひいろといふ柳女郎と呼者あり水蝶也○梅に蝶は時節たがへりとて詩に一生不得梅花蝶とよめりされど夫木集に定家卿

みつにくるてふの羽も白たへの軒端の梅の花乃ゆきてふ

とよめり○粉蝶を放ちて其止まる所に随ひ幸あるは唐明皇の故事なり天宝遺事に見えたり○てふ〳〵とまれ菜の葉にとまれ菜の葉にあいたら桑にとまれといふ童謡は古意を遺したりといへり羽州の方言にてふ〳〵をとどもといへり爾雅翼に菜虫の化するといふは黄蝶なり○東鑑に宝治元年三月黄蝶飛幅一丈許列三段許充満鎌倉中是兵革兆也承平ニハ則常陸下野天喜ニモ亦陸奥出羽有其怪将門貞任等及闘戦云々と見えたり文治二年に京師雨蝶と玉海にもしるせり○明和戊年丹波大江山の辺亀小野平村といふ所に八月の比蝶ふれる地に随れは皆死すと事三四寸におよぶといへり○小麦よく蝶に化す捜神記に麦之為胡蝶也と見えたり○口語にてふ〳〵をきらとあつひいふは蝶の楽舞のたより出たるなり源氏河海に蝶の楽は宇多院御時被作之由見李

部王記にも見えたり一説に蝶はかひこの蝶也子孫生産絶ざるの義なれば香は山鵲なり忠孝の意なりと禽経に見えたりとも八此二種を用ゐることといへり蝶は和名抄にいふ胡蝶楽なり鳥は体源抄に聖明楽也といへり○蝶鳥の舞の事聖徳太子の比よりといへり

でふ

和名抄に門戸具に鍱と出し漢語抄にいふ戸の帖木也とみえたり源氏にでふのいとちいさきびにまかれと見えたり今もでふとぞかしはわかれし俗に錠の字を用ふ字書を考ふるに或は鎖をでふといへり鍱はふせがるるといへり太神宮式に牒と見えたり次に鋪鐶ありて鍱一具と書せり注に管とあるはひつの事なるべし又勾(マガリ)古埜根雄などの名目あり次に匙鑰(カキ)あるは今なるでふと呼は鍱之白楽天が詩に印鎖澁(テ)難開といへり○牒も状のごとしまた朝野群載に牒状とも見え遠江國牒伊勢大神宮司衙と出たり

てぶり

手曲の義なり癖(クセ)なりといふ義也万葉集に

天さかるひなに五とせすまひつゝ都乃てぶりわすらえにけり

五とせは国司交替の年限四年は近国也五年は陸奥九州なと也家持越中の任の時にも志なさかるこしに五とせすみ〳〵てとよめり○手振は供奉の馬副をいへり六條修理

太夫
霞かゝ浪の山水もとさらてたちとまてなれそまつしよ

○俗語に徒手をもいへり

てうちょうし　蝶花形と書り銚子提に飾まりその用は塵を覆ふためへの蓋なり又典
薬頭の献まつる屠蘇白散の袋にも蝶の形をするは蝶よし酒毒を解する故といへり
今男蝶女蝶なとの折形あり是かひこの蝶といへりかひこれるを生付て子孫繁
昌の祝也○餝馬の具に蝶形あり長秋記にみえたり

△てへ　古今集に門をせらてへ拾遺集に落をそらてへ大和物語にもられさらとく
あやしきかをもいへの義也○てへりとも云への義也拾遺集うつほ物語の前にみえ
たり

てへら　者字をよめりといふの義といへりちりすして二四相通してその音とあるはちふ
とてふといふとし句絶の辞也○てへとは或はてれはとよみてかと起すその辞とす
るも文字はとをせよもち上句に属せる詞書になく用来れるを発語の詞のことく
得をしかに属するは誤なり○一説に皇明通紀の注に者胡語然辞とも明宋

実録に宋宋北慶乃為に捕はれ数年北慶王去く許して本国に帰さんやと諸臣答の辞に
者々せいふ者々を唐音にしらへいしといふ其ちえは訛ててへともよむといへり○
和名抄に何名に者度をいつとよめり今の氏姓にも称せり俗にといふかといふへきを
といつてといへり　その義なるへし

△てほん　源氏後拾遺集類聚雑要東鑑等にみゆ法帖をいふ日用雑字に手本とみえ
たるは役義旅艇の出つけをいふ之今てほとおとへはおもくいふにもとつる著聞集に花園
左大臣家に初てまゐりたりける侍の名簿のはしにかきて能は歌よみとかたりけるさ
みえたるは本邦にも古へはかくいへしにや

△てま　手間の義貫之集に
わかきみに鳴あかしなとさまよふてまかちおもて哀しそ吹
又手枕の古語とみえたり○てまの関は出雲にあり風土記に意宇郡道通国東堺
手間剗とみえ六帖に
堀川百首に
まてかたし人まちえんや氷せこそ留めかねてそうしまさ名けし

さらやとりとおもひしかとも八雲たつてまの関にも秋ハとまらす
留春不用関城固の意也○古事記に伯伎國之手間山本と見え倭名抄會見郡天萬とあり
も出雲と隣國なりかのハ一處なるにや旧事記に手向山とあるハ誤なり
てまり
手鞠之紗毬也とありて童女の弄ひ物也中山記にも女子於歳初皆擊毬為戲と
見えたり帝城景物略にいふ抗子児也ともいへりたちゆらとやらといふにあり○てまり
花ハ粉団花也といへり山てまりと称するハ聚八仙也琉球人の方に
うあゐ子に其名をえらてまり花なされるにおもこそせる
こでまりハ雪毬花也津軽にてちづうけといふ
てあさぐり 後撰集後拾遺集蜻蛉日記なとに見えたり手探の義也
△てみづ 禁秘御抄に手水をえへそうち今ハてうづといふ枕草紙などにもさうし日本
紀に洗手水をおほみてづとよめり儀式帳に洗手水手之区二所大神乃朝大御饌
夕大御饌乎日別ニ齋敬仕奉と見ゆ齋事ハかくあるべき事なれバてうづするを洮類(クワイ)といひ
てうづだらひを類盆といふ○手水の粉建武年中行事に見ゆ
△てん 貂をいふハてん字音なる貂なりしといひてんハいたちの義也○和
名抄に貂の和名といへる音の轉せる成べしされど黄鼠也独ハ倭字なりといへり蝦夷に
多しなどといふ○いてちのあき間のてんがららといふ事盛衰記に見えたりい
ちハてんを捕ものにてんハ兎を捕るをてんとき山に免ならるといへり○埃嚢抄
に文字に加ふるをてんといふハ梵語の摩多翻して點といふ是也といへり訓點の本なく
いふなり○北山抄直物の條に其剰闕者闕官之上引點也と見ゆ今点附けるといへり
へり○辰の一点寅の四点なといふハ刻也といへり
てんが 殿下と書り漢以来皇太子諸王に称する事事物紀原に見え日本紀に中臣鎌
子連の中大兄を称せる是也今にハもはら皇太子の称なり当時もはら関白の称とあなり
朝鮮国にハ其国王を称すとぞ
てんま 傳馬とかけり通鑑宣帝紀に出胡注に即驛馬といひ孝作紀及今に見えたり
天野氏曰倭俗以公役驛馬謂之傳馬又有幕下有司所出之印章奉事而經過之
人以之為證俗称御朱印傳馬若異邦以御史印章得騎遞馬○傳馬船ハ枚板小舩也
○屋に用さるまとなふハ天窓(マド)の略なるべし
てんたう 俗に天日を天道といひ伊勢の外日神を祭る所天道といふハ浮屠氏の

天道大日の称によれる也○暦家に天道神と称するは牛頭天王也されど本據なし○尾張丹羽郡寄木村の天道の社は式の稲置神社也

でんがく　洛陽田楽記に永長元年之夏洛陽大有田楽之事初自閭里及於公卿といへり高足(タカアシ)腰鼓銅鈸子(トビヤウシ)編木(サヽラ)等の藝あり又小鼓あり田野の楽といふなるべし或説に神楽を折て申楽とし申楽を削りて田楽とすともいへり今信濃佐久郡志賀村に田楽屋鋪あり常陸久慈郡金砂山の神事に田楽あり○俗間豆腐の製に田楽といふは田楽法師の竿に上りて踊る貌に似たるをもて名づくるといへり禁裡にて御煤払に用ゐさせらるゝ也

てんびん　等秤の唐音也又天平とも書かへり手をひんと読も唐音也

てんもく　甌をいふ建安の天目山の名によれり磁碗の源をいへり建盞の名も同じ○甲斐にも天目山あり禅僧業海元に入て天目の中峯に嗣法し帰朝して当山を開き天目山と号す○瀬戸天目あり西国中国四国北国常陸に茶碗をいへり

てんぽう　転蓬字後漢志に見えたり世に放縦不拘の人がらを指て転蓬者といへり蓬は葉は柳に似て花は野菊の開けるがごとし河原に多し詩に自首如飛蓬

てんゝ也

てんさるゝ　人に疵を指さるゝをいへり源氏にたゞ此君の点つきたまふまじく又人に点つかるべきふるまひはせじ河海に古人の詩冊に批点をいふはいさゝか褒貶したる意なれば其義也といへり尓雅注に以筆滅字為点とみえたり落書に点をうけるなどいふは捜神記に鈎其字頭といへる是也

てんじやうびと　殿上人と書り逍遥院説に四位五位六位までも昇殿を聴るゝ人をいふなり一書に殿上は三位以上なれば殿上すまじ地下人の許さるゝをいふ詞なるをいへり又雲客とも称す月卿に対せり○海人藻芥に童殿上人とて古は摂家の御子などを元服以前は宮仕はせたまふ如なる其例久しく絶たりと見えたり

△てめ　古今集にさゝげてめとよめり一説あり折てんといふに同じ万葉集に見えたり

△てもすまに　手を休めぬ意にもすまに衣うつなるさかへのよもすがら

△てや　俗に出ぬ故でやといふは出やらぬの急語成べし○西国中国に語末にいへら

△てゆ

△てよ

△てら　寺をよめり日本紀に精舍伽藍をもよめり荘嚴のてらめくや意にや今の朝鮮語にてるといへるもいかし韓語にや○寺尾の城ハ上野にあり世良田政義ゟ居城之○伊勢大神宮寺先為有崇遷建他處而今近神郡其崇未止除飯野之外移造便地者許之三代実録に見えたり

てらふ　日本紀にひとてらふところの衢をよめり人に照す義なるべし字書に言行相會而自媒以利己と見えたり衒も同じ新撰字鏡にてらハすふとよめり八寸ノ反ふ之又眩賣をもよめり又伏然よめり

△てり　艶にてらうそてらますことなどよめり八羽色照ありかに成べし

△てる　照をよめりたへ反てあれハ邪をてらかしらる詞なるべし増韻に昱日照とも見えり日本紀に明又映又昱をよめり新撰字鏡同してらハ寸ゝ反ふなり霊異記に炫もよめり

てるひ　天日をもいひ天子をもいふ日本紀に白日をよめり

△てもん　俗語也諂練の音和語の熟字なるべし

△でろ　出羽の方言に泥をいへり

△てわざ　手業の義也

△でゐ　東鑑に出居とかけり愚昧記にも出居廊と見えたり内より出て客に對し居る所をいふといへり田舎にて今もいへりでのちとはふもでゐの口の義也

△てゑ

△ておひ　手負と書り手を負ともいへり古事記に負賤奴之手と見えたり日本紀には被傷於弓矢手をよめり

ておほひ　庭訓往来に手蓋と見えたり体源抄ハ八幡殿着鎧次第に第十二手蓋と見ゆ後の籠手なるべし

倭訓栞前編十七終

倭訓栞前編十八

登の部

洞津 谷川士清 纂

と

門戸をよむハ通るの義といへり在城郭曰門在屋堂曰戸とみえ西土ハ皆ひらきた戸也我邦の上世も同しや𛀁戸ハ日本の制也といへり遣戸妻戸織戸なととといふ也○神代紀に水門とみえよみ萬葉集に川門をくくとよめるもあれハ由良のと久志のとなとも皆門乃字なるへし渡字を用るハあしし○所ととくいへる事古語に多し○弘仁私記序に古語謂居住為止ともみえたり○止苫迹なとやとしの假字に用る事日本紀にみえたる訓の略也或ハ苫ハ笘の誤寫也たいの音をとに用うるハ迺をの耐をとなと用ゐたるをしとつ○外ハ内に對しいふそとの略外宮又外山の類也○鋭ハとしの略時利ハとき略常ハとこの略也○音十鳥弟與なとも皆略語也詩經に以字を與字と通用せり左傳に其も與と用う之與と文に用るハ語を緩する也又及與とも連用せし○瓊をとよみしハ誤也ぬと訓すへしといへり○砥ハあらせど礪ハあらと也

物を磨ようなふ也新撰字鏡に砥をとぐと訓し礪とをやこよめり伊与砥
ハ類聚雑要にみえ西近江砥山三河名倉上野戸澤紀州神子濱但馬諸礒筑
後天草對馬青砥ホあり高雄山に名産あり西行法師

たか雄なる砥椋の山乃ほとゝぎすおのかゝたなをとぎすとそ鳴

○助語に多くとゝいへり真字伊勢物語に諸をとよめる是也又及とよめるハ彼さ
此空の意に用ゐたり暨も同し将兼和をよむハ皆俗語也以をよむハ與也
の訓あり又以與とも連用せり玖の助字に数多あれと皆與ハ黨與也施與也又授
也又侍也又如也なとと注せし義のし文梓弓ひけどひかねどの数ハ雖の義也とふし
もふしもあらんおもふれやのことも亦同し○ふと通るとあり色のちくさにうつろへつ
るハの義也今ハ限の色とえつまハと色にうつまハと易ても通ずへし然ともか
ハさしはけてらひとハ女もとかふ意ありといへり○とその男なるあり古事記に醉
く吐あがつとこそしらひふとみてぐると取持てといへる是なり捧物として奉る云
なるし万葉集にたきつきと往来と見れなといふ伊勢物語に君か方によする
と鳴なる兼盛集にかふそえる去と鳴るなる祝詞に天御蔭日の御蔭と皆とて

の男なり○日向郷名に覩唹とかくあり大隅郡名囎唹の唹の如し○古事
に刀字なとの假名とせし又澄をとの假名に用ふ○杼をとの假名とせし

△とあみ　万葉集に鳥網をとなみとよめり和名抄に鳥羅をとりあみとよめる是也

△とあさ　遠浅の義也海濱の荒磯なしぬといへり新六帖に

うねとらのいるぬさはさひみうれまうせしとあさもあらいなみもそこぬらし

△とい　著聞集にといなりける人ありけるとえたえよう得意の義にや今もいふ詞也○寛
仁三年太宰府言刀伊国賊来侵しとみえ又新羅送還刀伊所掠壹岐對馬男
女二百餘人とし小右記にみえたりさまハ刀伊ハ新羅乃属國なるへし太宰府
解にも高麗國為禦刀伊賊遣彼邊州而還為刀伊被獲也といへり

△とう　いとうなく物語にあるハ疾の義也日中行事に上首のくらんとのめりたま
うとうやとえするも同し下にとくゆるれやとあふえとらふ也とあり○桃
竹の事なとといへり西土にいふ藤席ハとむしろ也

どう　胴の音大腹と注し廣腸也と注も胴体なとといへり軀字をも用ゆまじと本
義に非す○身甲をどといへり胴の義也○胴丸といふ甲ハ板七枚にして縫の脇板

ふるしに胸板を通しつらぬくといふ○鼓といふも義同し木匡也○東れどう源氏に見ゆ倭名鈔に筒字を用ゆ○樋の類といふを筒より轉せる詞なるへし○博奕にいふも筒の義なるへし新猿樂記に見えたり○俗の口語に何といふ事をどうといへりどうしやとうする抔類也とにかくの轉訛なるへし

とうろう　唐式に燈籠とみえ禁裡七月の燈籠ハ二水記に十三日今日各燈籠進上とみえ明月記に近時民家今夜立長竿其末稍付如燈楼物張紙挙燈遠近有之とみえたり寛喜の比まてハ官家に用ゐさりしなるへしされハ中元の燈籠ハ堀川院の時に始るを御湯殿の記に十四日御とうろうあるへかりしよりまゐる室町殿より嘉例のとうろうまゐるとみえたり○まはりどうろうハ燈球也走馬燈ともいへりあげどうろうハ天燈とみえたり○石燈籠あり金燈籠あり○本朝式に燈楼に作るハ掛る物とみゆ又燈楼細といふ事雲圖抄諸節會にみゆ侍中群要同し涅槃經に燈爐あり三才圖會に燈架あり○燈籠大臣といふハ内大臣重盛卿也事ハ平家物語に見ゆ

とうぐう　東宮と書り太子を称せる御自躰の上にてハ東宮と書御居處に就てハ春宮と書ハ故實也といへり

とうさん　酒盃をいふ北山抄に螺盃銅盞とみえたり是にや和名抄に燈盞とみゆ或ハ湯盞とかけり又とさんともいへり今いふとのもハ古田織部助重能茶亭の饗に侍する時製し初める小盃の形也といへり

どうぼう　童坊とかけり鹿苑院義滿公の時華奢を事とし諂諛を風とするを細川頼之うれへて俳優の徒を剃髪し士大夫の前にて諂諛歌舞迎合諂笑して恥しめられしより起るといへりよりて薮坊又佞坊ともよべりけり○今も將軍家及尾張紀州なとにあり○高野東寺にて同朋と呼ハ力者也

△とえ

△とを　十をよむにとをハとの音也又は尾の義也一つより九つまて皆つといふ○南朝四百八十寺の十をしんと古来よみきたれり字彙補に十當音旬古人以十日為旬故如此讀とみえたり旬の音のちびたる也といへり○万葉集にはとをの假字に二五

とおり

とほし　古事記に折竹のとをゝくとみえたるに同しとをゝとも見え後

撰集に　秋萩の枝もとをゝになりゆくは白露まくをけるなりけり

とをよる　万葉集によめる竹のとをよる子等又なよ竹のとをよる子らなとみえ

たわゝたわみ依るの義也

ととのほり　田文の鉄にみえ出たる事は聖徳太子の秦川勝か悪夢をけしたまふ

呪言なるよし詠歌本紀にみえ全漸兵制にも載たりと心得らるし

なかれよのとゝのほりのしわさなるへしみな言のとゝのほりなる

十の眠にして十界といふ長夜の眠の中に十界を流転をするわさなれは皆目睲也と

いへることは音なれはおとのかなる也といへり

ことゝいひつ　伊勢物語に十といひつゝ四つは経にけりとみえ六条本には行とほくて五つを

みえたりきれいにをつく相馴ちし中の年月をかそふるに十と五つにはなく大かく

五十年なりその内に四十年は去りさるひとりける中なると四つは余よりかたく断ありけり

よて五十年に年たつも十とて四つは経にけると四十年になしてよめるは四つは経り

けりとあるをうけてよめる也と倭足の説なり

△とが　罪過といへり咎る意にくするなれ義也或は科とも見えり真名伊勢物語によまる

も過失の義也○三州とが明神は一宮也本宮は山頂にましませり式に砥鹿神社とみ

ゆ○とが川は津國にあり藤原雅敬に

いかなれし濁ありてけそれしよにたゝとか川の名を流るらむ

とがむ　咎字尤字なとをよめり科より出たる也は恠也と咎する意也神代紀り

愠をよめるは義訓也古事記に登賀米受とみえたり

とかま　中臣祓詞にゆ鋭鎌の義也又磨鎌の義なるへし杜詩に新月似磨鎌と

みえたり

とかく　神代紀に取捨をともかくもとよめり三代實録万葉集に左右をとかくにと

よめり古今集にとすれはかゝりかくすれはあなひふし源氏にとあれはか

くあれはかくと度々とは外の義かくは此の義なるへし兎角亀毛の意にいふは

傳會なるへし今とかくやといふて亀毛兎角の字は空海の書に出たるは比喩也

とがくし

信濃國に戸隠明神ましませり古事記に隠立磐戸之戸腋とあれはとがくれと訓へし神名式に水内郡白玉足穂命神社健御名方富命彦神別神社の二社即是なるにや今戸隠奥院は手力雄命中院は思兼命宝光院は表春命と傳へり神社考に月神之子手力雄神其子斤倉邊神者諏方神也とみえたりとし神名系譜にもしるせり舊事紀に天表春命思兼命兒信乃阿智祝等祖とみえたり伊那郡に阿智神社ましませり戸隠山九頭龍窟は地主神九頭龍権現也毎夜粢三升を炊て並に梨子をそへて神供とすといへり

とかつのある

松によめり松は百年に一度千年に十度花咲といひ傳ふる也今をときはかへるものも其花紺色なくしろれさきに咲といへり常のものは年毎に咲松黄といへり

△とき

時辰をいふ常の義也一日の十二時も一年の四時も千万世の時世も歳月のうつりゆきて其常を失はざるをいふなるべし日本紀に期をよめり諱訓抄に代もよめり又疾の義文選に時来亮急絃とみえたり逍遥院殿歟

何事も時をしれはよし夏来ぬにしきさまする麻乃さころも

孔子も時に中すといへり○時者はとれみしよむへし倉公傳にみえたり○昼夜十二時の剋は日の運りをとるをかきしたるすより出る日出の所を本として混儀子にくくてびえれは十二に分ちし也日出は寅也何ともとよ北へよる時も寅の方よりへよれはまて十二寸也といへり阿蘭陀の法は昼夜を廿四時に分つといふ○初字を詩の韵脚に用ゐるをはしと訓を初時の義なり○僧家に齋をとふも時に非る食を戒むるをもていへり老学庵筆記に蜀僧招客暮食謂之非時とみえたり○和名抄に因幡国の仁名に罵城とよめり日本紀に罵を馳に作りとふとよめるに同じ○名によめるは弓削以言為大江て東鑑にみえたり安徳帝の御諱言仁もときとよめり○土岐の姓は美濃の郡名より起る太平記にみえり

ときは

常磐とかくといふは変ることなきをいふ○葛野郡常盤村に常盤殿常磐亭あり其亭は源常の山荘也雙丘の南にあり平頼盛が隠れし所也○源義朝の妾に常磐あり国初の舞妓に常磐あり石田三成の女也

しらひやうしと真西山の孫女の鼓舞妓となるしも同日の談なり
とぞいへ　解縄也祓に用ふ口伝あり嚼解の態あり今紙捻を用ふ江次第
に東廊の大祓に祝師著座臨禊詞及八張解縄了禊了又平野祭に宮主
奉仕祓詞の細書に到祓清之處以人形令呴給到中臣被八張取割之處解
縄給とみえたり
ときはぎ　常葉木なるべし万葉集に常葉之樹とみえたり元正紀にも其地者
皆殖常葉之樹とみせり四時不変なるをいふなりて松をいへり萬葉にもよめり
中山録には福木一名常盤木四時不凋とみえたり盤は磐と通用せり○木曽
にときはまんさくといへるは木と呼で寒あるひといへり○ときはの杜は山
城也新勅撰集にみえたりときはの里は嵐山にありといへり井は拾芥抄に春日南京極西
太政大臣實氏公家とあり又世に常盤井入道と称す常葉氏は陸奥弥四郎
北条時茂の後也常羽御厨は下総國豊田郡也將門記にみえたり
ときおく　日本紀に非時を訓し万葉集に不時ともみえたり又いへばおきてともよめり
時なくといふに同し臨時も同義也時をしもおもふ同意也万葉集にみえしその

耳なの山は時なくぞ雪はふりけるとみえたり
ときめく　人の時にあひさかゆるを花の時といへるにもなり○枕草紙によむといめきて
するもいふしりたる事にあたりて心の時めく意なり
ときのくひ　時杭也禁秘抄に丑杭以後為明日分とみえたり枕草紙によるへけのをに
し時丑みつ旅よろふしあてともあふひて時のくひさしときもいへしかと
う旅丸つうし八つなとそそをよしびたるものとよぶて何もくもの音そくひはさし
かるくいつり丑杭を削木也ともいへりや
ときのふだ　吉記に時簡とみえたり禁中の宝物也新六帖に
うしみつとひとかたき月のかけおそくなすむ夜の時のふだかな
ときまうし　奏時といふ也侍中群要に亥一刻左近衛夜行官人初奏時事とみえ
少大嘗會記にも采女申取とみえたり
ときつくる　時の色はつくる也やうまし鶏を鐘へかけて吶喊なしとみえたり
又堀川百首に
うらかしやそめくらぬ沖にかくそするうつくし舟にとけつるよ

○軍神招禱ありてまつりたるを附つくるといふ敵軍退散して神を送
り奉るを以勝時と名くといへり

ときつかぜ　時つ風なりつは助語五日の一風十日の一雨といへるが如しといふ
し万葉集には皆海の事によみたれど潮のさしくる時に必風のおこるを
いふ也といへり

ときのこゑ　鬨字をよめり孟子注に鬨声と見え史記に呼声動天と見えたり禁中
にて時をまうしに声あげといひて時の義也神代紀よりよ雄誥をよめりと口訣に
見えたり三度声を発するも習ありといへり或は鯨波を訓ずを水静鯨波なく西土
の文にも見えたり

ときはかきは　古事記に常石堅石と書り日本紀には磐石とかくまたときはかきは
とこいは也こい反き也かきはかたきの畧なり

ときのとがり　日本紀に四刻をよめり我邦漏刻の製一時を四に分てるをもて
也昼夜四十八尅蓮華漏に同し

ときのきざみ　日本紀に漏尅を訓せり漏刻を伺ふて鐘鼓をうつ也貞観式にあり

凡知時以鼓示尅以鐘とこあり是は唐曆に更以撃鼓為節点以撃鐘為節とい
ふによれり更は時也点は刻也一説に寅の一点なしといふは一時を五つに分ていふ也と
いへり

ときうしなふ　文選に失時者零落す源氏に
いつか又春の都の花を見ん時うしなへる山かつにして

ときあらひぎぬ　拾遺集によめり解て洗ふ衣の義也○万葉集にときあ
らひごろもと見えたり新六帖に
浅ましや賤がねとしのときころもとふてあらはれは人をとてまたれ

ときさけごろも　綿抜の衣の事也
夏くれは賤か麻衣ときさけてかくねなるこそひやすかりけれ

△とく
神代紀に解をよめり糸緒なとにいふ是也○氷のとくるは泮とよ
めり又融釋をとよめりとけるも同し又おてとるむは懈と同し説をよむ
も解の義也論説の時は音せり遊説の時は音ぜいやなるの時は税に同し説篤
とすゆ○疾をよめりはやく及ぶの義也趣も説文に疾也とみゆ○土貢の音

みつぎ国々より奉る土産をいふ志摩國に土貢の嶋あり慥柄のつとも也今
東宮にもいへり○土公の音も呼り
とぐ
琢磨をいふ物を鋭くする意なるべし日本紀に削をよめり新撰字鏡に
研をとぐとよむ又砥をとぐ又瑳をとぐ石又摘をとぐするとよめり○西
偏にて米をとぐといふは淅をいへり○遂をもよめり俗にとくけるといひあふ
あとぐるといふ是也進也と注せり論語の遂事をとげんしことよめるへと
げにし事也さまざま朱註の意にハ非ず
とくり 曇具理の義なるべし群砕錄に今人呼蔵酒器曰曇とみえ壜にと
似たり墨莊漫錄に東坡云新釀甚佳求一具理具理南荒人餅覓とみえたり膳
瓶と同し又陶器にやくり又きり也下總の國にてはぢちといふ
とくゐ 源氏桃州帯をとくゐとぞ唐詩に人間得意人とみえたり商家の
顧主をいふも是義也
とくせい 後漢書に徳政不能救世溷乱とみえたり今いふ所の事は二水記永
正元年九月十一日今日為武家徳政之成札被打とみえ應仁記に彼借銭を破し

んにし前代未聞の徳政といふ事をいひ出さしとみえたり
とく 寛なる意にいへり物を解より出たる辞なるべし万葉集にいそとくひ
もとくと結ひし立田山とみえ續千載集に
ふりかくる額の髪のとくみだれとくとたのむる今日の暮かな
又得々の意也ともいへり東坡詩に知是多情得々来といへり○疾々の義ともあり
俗にとうとうといへり○ 埃嚢抄に尾州記を引て有女人容貌太端俗語徳々志
とみえたり
とくはよし 日本紀竟宴の歌によめり解由の義也格に如有闕怠仍停解由と
みえ明律にも官吏給由とみえたり
とくせまこ 神楽歌にみえたり得選子也國史に淳和の朝大和國女孺多米
宿祢當刀自女預得選とみえ江次第に得選厨子所女官於采女中選其
人故得名といへり
◇とげ 簽刺をいふ鋭毛の義成へし竹木刺とみえたり或ハとぎといふ
とけい 自鳴鐘をいふ蓬窓續錄にみえ磁針を土圭針といふによりなりと

いへり慶長中の日記にハ斗雞とみえたりしといへり我方の此製あるも慶長十三年の夏伊斯把尒亞國より渡せしが始とぞいへり○水どけいハ五更漏也又淤どけいあり香盤ハ無聲漏也又枕どけい印籠どけい根付どけいあり又三年に一度づゝまきけるとけいを渡せり○自鳴鈴あり同じ國よりまゐるといへり○とけい草と呼者ハ纏枝牡丹也といへり始ハがらんぎくといひしとぞ紅毛語也享保中始て渡る西番蓮と名付け渡せり

△とこ　常とよむハ時と義通へり歳月移り行ども古今変らぬをいふ也○床ハ處と義通へり○神代紀に國常立尊を国底立尊ともいへり今も底をとこともいふ事あるや○万葉集に奥床に母ハ睡有外床に父ハ寝有ともいへり○人家別に上牀のやうこと称するあり臥也といへり舟にいふハ笭とよめり洞床室床などハ茶人の称する所也○秋の田のとこつまといふを兎鼓と書り下学集にも見ゆ○床の浦ハ石見にあり海邊石を寝しるる床なるをとくに名しといへり○思の保の日記にとこ山のあさりみれハとこめくさするかたすみひの袖に置かる雪おちしふすもぐもいとさしてつくりいてさるやうなりしとぞしるしたり

とろふ　神代紀に詛をとこひのろふといふ也○古事記に今返其詛戸といふ事もみえ其詛の術并に其具をもいへるハ詛戸ハ其處をいふ也○貞観政要の註に請神加殃謂之詛とあるも呪も同じ

とこよ　神代紀に常世と書り天照大神の盤窟に隠れたまひし時より起れる詞なれバ古事記に常夜と書る正義なるべし所謂常世の思兼神常世の長鳴鳥なと是なり○常世ハ國常立の世といふ意にて祝称也よて顕宗紀室寿の辞にも吾常世等と人を祝してもいひ古事雄略記の歌にも舞する女常世にもがもともいへり○日本紀中に常世郷といへるハ皆僻遠の地を指し不変の意を祝して云るまで雄略紀にハ蓬莱を訓してとこよのくにといへり万葉集に

吾妹兒ハ常世国に住けらし昔みしよりをちましにけり

後拾遺集に

古への如くよの國やかはりにしとろくしるとこまで忘れて

○垂仁紀に伊勢國の事に常世の浪とよめるも神風のよせてくる国なれバ祝していふ也万葉集に我國ハ常世になんといへり○とこよあとすなるとみゆるハ

橘といへり田道間守か常世の國に往て採来りしよし垂仁紀にみえたり○應る
の常世より来るといふ事髄脳なとにみえたり今常盤嶋より来るといふ是也
胡鳫なといふ意なるべし元輔集赤染集なとにもよめる事みえたり○万
葉集にとこよたと出るか如くよといふハ黄泉を指といへり常夜の義とそ謂る
也し書紀に大漸をとこつくふとよめるも此意也古事記に常夜往とみえ也往ハ月
日の經行をいふ万葉集に常去(ユケ)の夏冬往や又一年にふたゝび行ぬ秋山亦後撰
集にあまりさへありて行つゝ年なれもみえたり旧事紀に往常夜國とあるハ誤
なるべしといへり○三代實録に石見國常世國社神もみえたり

ところ　地許處所をよめり仮ハ所に同し古事記に地矣阿多良斯登許曽(トコヲアタラシトコソ)
とみえ昏経に告よむ昏の我成功所と註に所在ととを前漢書に在所の語多く
後漢巳後ハ所在語多し韻学集成に方所者所嚮之方處所者指所在之
處二者雖異其為所則一也といふ所を上へ回て讀ハ皆虚辞也助語辞に所
是活字とみゆ詩緝に許ハ助語也とみゆ年所なといふハかしこの意也常居(トコヲリ)の
義なるべし○禁中にいふハ寮司めくし記録所御書所大歌所の類なり○国勢
にも税大帳所朝集所健児所國掌所等みえ是を所々雑人といへりと朝野
羣載にみゆ○人に幾所といふハ續日本紀の宣命に二所の天皇とみえたり
幾柱といふにひとし○和名鈔に黄蘚新撰字鏡に土蘚とも訓せり拾遺集に
よめり古事記にところづらともみえ也蘚蔓の義也春盤に用ゐハ所領の義を取也
本朝式に薢とみえ漢語抄にハ野老と書り所出未詳といへり長鬚ある故もとと名
くる也類聚雑要五節殿上饗にもみえたり○あまどころと称するハ萎蕤也
姫どころと称するハ女萎也鬼どころと称するハ草薢也枕草帋にみゆ山どころ
といふハ知母也字鏡にみゆ○氏に所といふハ東鑑にみえ野老とかけるハ後太平
記にみえたり

とことハ　万葉集に常不止をよみりとて常盤の畧也といへり或ハ平生をよめり
佛足石の歌に止已止婆とみえ也とこしなへかりとよむも同意也

とこづめ　眠瘡ならふ床をつめしより發しる瘡なれハ床積(ツメ)の義なるべし　新六
帖に

竹絶くさのとふすねの床つめりうるよの乱き朽やさそれん

とこやミ　神代紀に常闇又長夜とよめり梵書に長ハ常也と注せり

とこめづら　日本紀に永久とよめり人麿の歌におのがつまこそとこめづらなれとよめり常にめづらしき義也鎮常をもよめり

とこしなへ　鎮常長字などをよめり常しなへの義しなハ助詞也常しく年を續並しく事也といへり鎮長鎮日を同し日本紀万葉集の歌などにもみえたり又ハの畧なるべし○終古をよむハ考工記の注に齊人言終古猶言常也と見ゆ今よりハ以来を終今といふ漢文帝紀にも見えたり

とこよのかみ　日本紀に芋虫を祭りて常世神と称して富を致すとて愚民を欺しことみえたり西土金蚕の説を聞傳へて造言せるなるべし新撰字鏡に蠲又蝎をとこよ虫と訓せり

△とさ　國名に呼ハ土左郡土佐郷倭名抄に見えそこに土左大神社ましますとそ名づけし其神ハ葛木一言主神にて雄畧天皇の時に土左に故ありて移らせたまへる事日本紀續紀及風土記等に詳に見えたり○大同類聚方に土左郡久ゆ度會之黨所和而祭宮次官藤原守勝上之朝方也其功治乱心世也と見ゆ○土左の

冠者希義ハ頼朝の弟也蓮池氏希義を殺して土左を領す長曽我部元親又蓮池氏を討滅にき

とざし　倭名抄に扃をよめり常に鎖又関をよめり戸を扶の義也○とざさぬ御代ハ太平の体をいへり文徳実録に時属聖運不閉門鍵といひ史記に門不閉とも見えたり

△とし　疾速も鋭利も義通へり霊異記に聡新撰字鏡に銛もよめり○年をよむも疾の義也文選に年往迅勁矢といへり左傳正義二年歳載祀異代殊名而其実一也と見えたり西域以五月為歳首酉陽雜組にみえ古今集にとしえあへにむつもとしふれハれりきなも浮まれくするよりひら

○行年ともよめり春秋ともよめり○拾遺集に年もよしこひも無くよめるハ豊年をいふ也祝詞式に祈年(トシゴヒ)といひ御歳といふ是也年ハもと季の省文穀の名也

とじ　婦女の通称也いらじめともいへり隋書禮儀志に叢衣刀人采女とあるも且是なるべし倭名鈔の説ハ心得がたし建暦御紀に刀自ハ御膳宿臺所各別也と見ゆ○万葉集にをさとじおもとじとよめるハ老女の称也吾兒のとじなどもいへ

るハ女友をも称せるなり日本紀に夫人とおほとじと訓し三代實録に妖人とをとじ
ともみえり薩戒記に内侍所の刀子なとといつるハ女官の称建武年中行事に内侍
所に行幸なりぬれハ御おほとじのとねじやとみえたるハ刀自祝詞なとにや也類聚
國史に黒刀自廣刀自女なといつるハ自称也日本紀に壓乞戸母なといへるハ称人の
辞也戸母ハ戸主の意也霊異記に家室とかいてのとじとよめり○侍中群要に上刀自
取進之といふ事見ゆこも刀子なるべし○刀子の音をも呼べし式に長刀子短刀子あり

としぎ　年木の義としぎこるとをつむともよめり山人の春の用意に薪をこり
つむ也といふ也儀式帳なとに大物忌の御年木切始とみえたり

としみ　蜻蛉日記にみえたるハ精進あがりのやうなる也○源氏物語に御としみの
事あらしての日なとにみえたるも精進落の事なると細流にいへりしみハ年満也三代
實録に太皇太后今年始満五十之算由是慶賀修善祈禱餘齡又宴太政大臣
於内殿以満六十之齢ともあり釈門正統にハ年満二十ともみえたり○凡て賀ハ四十
を老の始とすれハ四十より五十六十と數へて寿賀の礼を行也昭宣公の四十の賀
伊勢物語にも見ゆ西土にてハ宋史に初てみえたり皆正月朔或ハ立春をもちて捷用

尺牘双魚に四十以上百歳までを賀する文を載たり皇朝にてハ淳和天皇の時
太上天皇四十の賀を行せたまふを初とし其後君臣相共に其慶賀を行
ハせられし事國史撰集に往々みえたりされと其月を記せし事皆異なり是其生
誕の節を用ゐ来りしにやよて賀を行ふ時をもて花賀紅葉賀藤花賀紅梅賀雪
賀なとの名ありけるなりし○世俗に八十八を賀するハ八の數ハ我邦殊に尚ふ所にし
て相重ねたる年壽なれは是を祝するなりされと其始を詳にせず或ハ天宝年
中に雲南の役に発し男年廿四なりしか命を惜て已か臂を大石もて打折て古
郷に帰り六十餘年を送り八十八までの壽を育ちし故事に據るや翁の年とふ
も米の拆字八十八なるをもてまずかくをそるるなともいふなり○生日を賀せしる
ると天壽節といふ其事ハ光仁天皇の勅に十月十三日是朕生日仍名此日為天長節
と類聚國史にみえ唐玄宗の生日を千秋節とせし事唐書にみえたり

としなみ　年次の義月次日次といふかごとし狭にハ多く波によせり

としのを　万葉集續日本紀の宣命に年緒とありよて長く絶ぬ意又ひきはふるとも
属けり緒ハ年々のはるとをいふなり俗に今の細なといふあり西土にも心緒愁緒

ふとの語あり又年の尾の義ともいへりといへり

○としたま　歳贄といふ年の賜といふを略せし物なるべし今年ぎよくと音にもいへり新千載

集

諸人にたまものすゝめしはるの初めのりの豊のあかりは

○としよる　年寄の義老人をいへり○年寄職名にもいへるは後世の事也上下に通じて此称あり西土に耆老といふもの一郷に一人づゝあり老人をもいへり○中古ら年寄は坊正也

○としわすれ　瑯瑘代酔に准人歳莫家人宴集曰別歳といへり東坡が詩序に蜀俗歳晩酒食相邀為別歳といへり禁裡にもある事也

○としごひまつり　祈年祭の訓也周禮に祈年は豊年を求る也といへりされど祝詞にも二月に御年初将賜と云説文に年は穀熟也といへり今伊勢参宮に年越詣といへる事は此事より謬れるなるべし祈年祭は天武天皇四年より始れりといへど崇神天皇の御代に始るとすべし類聚国史桓武天皇延暦十七年定可奉祈年幣帛神社といへり○寛平五年格に二月祈年六月十二月月次十一月新嘗祭等者国家之大事也欲令歳災不起時令須慶預此祭神京畿外国大小通計五百五十八社といへり延喜式に祈年祭神三千一百三十二座といへり思の保の日記に祈年穀奉幣といへり

△とを

△とせ　一年二年より万歳までかぞふる言ひとしの略せる也万葉集によしの八とせ伊勢物語にとしのみとせといへり

△とそ　屠蘇は元日に献る酒の名内々行事に二袋紅の切にて五寸ばかりに鱗形にして柳の枝に糸にてつくる白散は刻なくして御銚子に入るといふ又大神宮式儀式帳にも白散のことにて屠蘇といひ内宮年中行事には屠蘇をあはせ云り今二宮の白散は米粉を用るともいふ也是古椒酒の遺意也建武年中行事には神明白散といへり二献の時也三献に度嶂散を供す御薬の儀式は三ヶ日也といへり屠蘇は延喜式に委し唐孫思邈より始りて菴の名とも酒の名ともいふ又羽帳の名也ともいふ本字は廜蘇也といへり又幼者は年を得まとて先だちてのみ老人は年を失へば後れてのむよし時鏡新書にみえ盧柳南は歳始に不遜を教るに似たりといひて自家には長者より飲初歳晩医より人に屠蘇袋を送る事は燕朝樂事にみえ

えらり弘仁年中より始るとぞ

△とだる　古事記にとだる天之御巣ともみゆ百十足の義十八全の意也出雲風土記に五十足天日栖宮ともみえ万葉集に百足の語もある也といへり

とだえ　跡絶の義なるべし間断の意にいへり或は端といふ太平記にみゆ○後拾遺集にあやふしとみゆるとだえの丸木橋ともよめり名所のはたえの橋と混説するはいかゞ

とぶち　鷹狩によめり鳥立の義也○とだちの原は名所に祝す

どだい　土代は朝野群載国務條に四度公文土代交替とみえ庭訓にも草案土代とあり

△どち　万葉集に共字をよめり友どちおりふどちなど是也今俗どしといへり○鼈を田舎にてどちといへり又るを訓すくくらふなもあり即胴亀也よて尾張に著ばとちの鏡といふ伊勢にどんがめといふと同し

とぢめ　結目の義也終の意にいへり新撰六帖に

ものは川の瀬にはつかさそくちるてえ花のとぢめなりけれ

櫃を掛にくとぢるえるに見えり

△とづ　閉をよめり門をとざしかしたる辞なるべし○新撰字鏡に図をとぢかくむとよめり閑と注し絎をとぢとよめり鹿縫と注せり又緘をよめり

とつぐ　日本紀に交又交接をよめり張績の義なるべし古事記に突其美人之富登とみえ祝詞に嫁継をよめり○帰をとつぐともよめり訓也されと公羊傳の注に婦人以夫為家故謂嫁為帰とありまた字のまゝかへるとよむべし○埃嚢抄に點をとつくとつきてといふ阿弥陀秘密讃に伊字點側都々二點置一、大般涅槃義一、方便神通義といへり

とづく　日本紀に達をよめり重之集にもみえたり常に届をとどくといふもとゞくとはよめり届し出すべし留着の義なるべし○口語にとどけくたとどけに逆不やすけなといふは達の意也

とつみや　日本紀に宮をよめり常津宮の義也万葉集に

月も日もかはりゆくともえぬにふる三諸の山のとつみやところ

○外宮の号は古事記にみえたり内宮は内裡の内なる古事記に神朝廷と称せる故なるべし○大司長則朝臣記に正月元日内宮に参りまく後外宮に参らる御祭

る故ありて外宮前日にある也といへり

とつぎとしへたり　日本紀私記に鶺鴒を訓せり交敎鳥の義也諾冊二尊の故事によれる名なり和泉式部家集に

世中ならぬおほせるのなかりしへとつぎ人と色語にまよはましやは

としての略也日本紀竟宴の哥にゑまろの御世を渡すなるてあまることよまれり

△とて

真名伊勢物語に左とよむは左は自由ならぬ故外手といふ也

とてと　とありてとしまてもあらじといふ意也○とてもかくてもといふ詞にありて俗に迚字を造れりてとかくてを略してとてといひかゝりもちつとかくといふに同じ

△とと

兒女の語に魚をいふは芝峯類説に南朝呼魚為斗といへるも雛鵡語也といへり鳥をいふは重なる也手をてといふか如し○俗に父をいふはちゝと音通す稗史に爹々とみえたり南部の俗はちよんといふ長崎にてちやんといふ○菅清公記に俗に跡をとゝといふと尾張國ととゝ川の事によりて埃嚢抄にみゆ

とゞむ

留止をよめりとゞむるは自然なるにくゞめるは自己よりいふ皆むに反せり駐をとよめ

り○人を殺しさえとゞまるといふは其事曾我物語にみえたりとゞめは止矢なるといふ意也

△とゞろ

神代紀に鼓の字をよめり皇代紀に迹驚の字をとゞろきとよめり代あるに万葉集には動字響字又動響又動々ともよめり空もとゞろにといふ古事記に伏汗気而蹈登杼呂許志とみえてとゞろかしにするを也天の原ふみとゞろかしとよめるも同し轟字をよめるも義通りとゞろけるなる家ともみえたり新撰字鏡に鬧もよめり又砦又礔礚又吸喊又嘈囐又轟とよめり○甲斐の郡名に等力ととゞろきともよめり音の轉せる也○とゞろきの橋は奈良にありとゞろの橋は近江栗田の橋といふといへり○とゞろきの社は出雲にあり風土記に見ゆ○とゞろき見あり

とゝのふ

常に調とよめり神代紀に整頓二字をよめり推古紀に齊とよめり○今物買ことゝのふも通せり○名に源等をよめり齊等の義也

△となふ

日本紀に唱字をよめり音なふの略語也新撰字鏡には嗶とよめり○狗をよむは漢書の注に行示也とみえ今ことまつるといふ是也よく日本紀に歴間をとなへとふくよめり又となふるもみえたり

とゐり 隣をいふ戸並の義ならび又なら也といへり新古帖に
里人のあさとなりしく住家はいつくはあれと隣なりけるを
五家相保の意なる事し○隣をかけるは孟母の三遷といふ也○隣のふえは晋向秀か夜
笛を聴て亡友嵆康か事をおもひ出る故事なり

とんぼう 日本紀に蜻蛉とも曲翳とも書り蜻蛉はいはゆる後翳の義也蜻蛉は雌雄互り
尾を銜く輪になりて飛をいふ也又一つの尾を銜むてるなひ出るもあり

とゝご 伊勢内宮に此事あり鳥名子と書り延喜式には鳥子名儛とみえ儀式帳に
とまうえんたく 元々集に今世号鳥名子則金鶏長鳴縁也といへり俗にひよくの名
ともいふ野篠村蚊野村原村山神村の四所より來り闘雞のまねして笛を吹て石坪に
侍ふ三節禮竟宴の為也

△とにかくに 三代實錄に左右をよめりとかくに同じ万葉集に云ことよ左も右も
又とにかくに人はいふとも又とにかくに意はとふそしてみえたり

△とぬ

△とねり 侍中群要に散位とよめり公事根源に大節に刀称めせし御するは刀称は六位

といふ六位のものまでとみゆせしといへれし古はよ刀祢といふは五位以上にも通ずる
名目也此辞は勅の手之勅は六位以下にのたまふなれは古今の通規也といへり西宮抄重陽裏
書に大節には大夫を称刀祢小節には侍従称如儀式とみえ又これは官職ある人をは貴賤を
とはずいふと知へし祝詞式に倭國六縣の刀祢男女に至るまでとらひ朝野群載に檢
非違使廳下刀祢職事とみえ又刀祢職を補任せる左京職の符に保内宜兼知と
みえ李部王記に百官主典以上称刀祢也とみえたり諸の長上の官をいふ主典以上は皆
長上の官也殿寢の義にて近の意なるへし又蚕のとねやとも里のとねとも山のとねとも
庭訓往来に淀河尻刀祢ともみえたり今も信濃にては田を殖うる男をいふ
とぞ後世には貴賤ともに公に仕へする事ある者とすへていひ里長防令なとをし
も刀祢といへり後拾遺集神祇部の端詞今昔物語にも里長とも又西京の刀祢なと
といへり防令なるべけれは人をまつふ辞也まさすけ五節の條にとね君ともみ
えたり○紫式部日記にとうら人たちとねあへきいひしと書るも刀祢事といふにてあり
しならし○鞍馬の敷の天神の神職の者を代々刀祢と呼て刀称物語といふ書は文
甚古く伊勢神宮にもありし事内宮年中行事にみえたくく今も遺せり

山城の賀茂にハ今猶存せりとそ○とね川ハ上野國利根郡也三大河の一つ也源顕家の足利義詮を破りし所也新勅撰集に

さゝらけハ袖してやせきとね川の石こそふむしもらさかもしよう

おいねまめを語り侍へるなつし○今神宮にて六月十一日九月十一日十二月十一日カ祢御内を掃除をなしといふ

舎人とよめるカ祢入の義なるへし或ハ禁中に宿直し守護する人ゆ統く

とねり

とハとのねりの義也ともいへり後漢書の注に親近左右之通称とみえたり日本紀に近習舎人とみえ帳内兵衛なりと訓せり親王に賜ふるを帳内とし諸臣に賜ふるを資人といふ○舎又音せさ釈と同し釋菜なとみゆ○内舎人大舎人中宮春宮舎人なとあり一書に近衛舎人於近衛府中将曹府生番長近衛等皆謂之近衛舎人或謂之随身とみえたり○梁塵鈔に小舎人ハ殿上童といふとみえ花鳥餘情に中少將の召具する童を小舎人といふ也といへり○牛車によりいふハ史泰紀の注に舎人を立廐内小吏官名といふによるなるへし大嘗會記に犢の舎人といひ東鑑にも御廐舎人とみえたり今内舎人の府属總て舎人と称して常に洛外みぞろ池

市原鞍馬の邊に耕食して官牛を飼といへり○大和國添下郡の山田村の西松尾寺矢田村の属邑東明寺ハ舎人親王の建たまふよし傳へり東明寺に紫紙銀泥の法華經あり傳へて親王の自染といへり

△との

殿とよめり宮殿の制大戸道尊より始るよし神代纂疏にもみえたりまハ神名によるにや又戸名の義なるへし宮中に諸殿ありて各其名ありて分てハかく呼へり然しアラハ草殿釣殿柏殿渡殿なとよみありて文鎮也しるし也○伊藤氏の説に石林燕語に丘霆與陳伯之書謂臨川王宏為臨川殿也とみえたり我邦貴人を称して殿とよふも謂ふなりといへり海人藻芥に内裡に於ても人を指しやハ執柄家の外ハ不可有之御前に於て関白殿とや也とみえたり○殿法印良忠ハ関白良實之孫なるをもて也丈をさして殿といふも物語にみえたりて全漸兵制に丈夫を譯せり又將人と訳せり○今殿を音にて呼ハ將軍家を指也よて殿中といふ將軍家に限れり○殿閣等の屋にある歟ハ嘲風也○殿野村吉野十二村庄にあり殿堅兵衛か宅あり

とのゐ

日本紀に宿直侍宿とよめり殿居にありし宿直も同し晝に

なとらひ夜に宿といふ文選注に直ハ謂宿衛禁中以備非常也といへり殿寝の義也
寝といふなるべし

とのと　主殿とよめり日本紀和名鈔にとのもりとよめるハ略語也歟又とのもりれ
とものみやつことみえたり

とのゑ　禁中の外衛也百寮訓要抄に宮門の外を警固する職也といへり○とのゑ
とよむ身といふハ左右の衛門の陣を守る官人なるゆゑ○外の衛ゆゑあふちなど
まうて丈木集にも御垣守外の衛なる火たく陰とよめり○一説にハ内
重中重内重なる中の重の假字なるべしといへり

とのばら　栄花物語に見ゆ殿腹の義宮腹などいふが如し大臣の室の腹なる
君たち姫君などを源本にハいひしを後にハ常の男子にいへり

とのうつり　册紙の名枕草紙にも見ゆ殿移の義御堂関白殿新殿にうつらせたまふ時
御しつらひたるものなりといへり

とのごもり　新葉集に殿隠とみえたり隠居者とつけたるなれハ中臣祓の天のみか
け日のみかげとかくるゝをいふにしてさ読ハ非也こもりすとしてし後にいへり

とのいもの　宿直する臥具をいへり○とのゐ物ハ袋源氏にみえ宿直人の名字也衣
を出しおくをいへり俗にいふ畜袋也

とのいすがた　直衣着たる体をいふといへりされど常にも文衣冠をもいふなり
ハ御ゆるしなくしては宿直直衣にて主上の御前へ出仕し侍らざる事也宿衣と
ハ衣冠の事也といへり禁秘抄聴雑袍とみえたるも是也

△とは　とこしはの略也万葉集に常不止(トコトハ)とよめるハ畧語にて物のやすまぬ
ことに転ずる故に不止をよめりとハ別しておもふよめり○古今
集に山城のよどのわかこもかりにだにとよめるも君がね常磐を兼ていへり結語よとゝいへる皆
よみいへりてきこゆべし

とばり　日本紀に帳をよみ古事記に幕をよみ倭名抄に幌をよみ常に幔をよめり戸
張の義也今いふ暖簾の類也○雲のとばり霧のとばりなどよむハえそてたる也○とばり
あげハ褰帳といふ玉葉集に今上御即位の時大納言三位とばりあげ仕うまつりて上
階して侍りし時とぞほのかに聞ける
なびくしも雲のとばりをかゝげつゝやまとのあとみるしのかひもあるかな

とぐかり
詞にいふかゝるとぐかりの義也○とがりえつるとぐかりやをむふといへ
かしのえるかゝれる細流に時えうちの義ともいふ後拾遺集に
なかしらく明すれあかん秋の夜ハまてかしまれのとがりとだに
とりどかゝり
源氏物語にいふ不聞而自談也千載集に
つれしと恨ぬかりひとなるぬれいとりどかゝりのせかねしきる
△とひ
閣漏といふ戸筧の義成へし東鑑に樋此にあり大鏡にもみかひに樋つけ
てと侍るこそ見ゆ
とびら
和名鈔に扇又扉とよめり神代直指抄に左右相合をとびらといふ一つは戸
といふといへり戸枚の義成へし新撰字鏡に扃又扇とよめり又闔は門のとびらと
よめり
とひや
問屋と常にかけりされと倭名鈔に邸はつやと訓せりといふ又つや也一説に
集屋(ツドヒヤ)の略ともいへり
とひのを
車にいへり著聞集なとにみえて鴟尾とかけり小轅とよめり或ハ冠の具にも
えのをとともいへり領の緒なとも書り

とひすは
庭訓に問丸とみゆ小栗實記に古へ家号を丸とよふ今の屋の如く称
を故に向屋は向丸といふ舟の号に何丸とよふも其遺言也といへり
とびのをごし
延喜式に鵄尾琴とみえたり和名鈔に倭琴首造鵄尾之形也と
いへり神武紀に金色の鵄天皇の弓弭に止りしとみえたり琴の起りハ弓を並へたる
といふもあれは是其義に據りしなるへし内宮の御神宝にもあり
△とふ
古事記に白向をとふらふ霊異記に詣をよむ外訃(トイフ)の義也といへり借向(シヤ)と
いふもちかしとひとふ意也日本紀にとぶしとよむもいはし反ひ也○万葉集にてふと
とふともよめりとふらふを略したる語也○亡人のたまに薦福するをとふらふともとふ
といふもいへり追遠の義弔向の心あるへしといへるもあとをとふともいへり新千
載集に
天うけるさとにありきしたらひけめあらしくふ宿の法乃むしろふ
又新撰字鏡に抵償をとふみずれとよめるも此義なるへし
とぶ
飛はすめり疾く経るの義成へし
とぶさ
顕昭説に梢をいふかといへり今いふぼさんといふに同し語なるへし 楉(カチ)のとぶさ

はしるかえる枝といふ也後拾遺集に
家におく都の花のとぶさゆゑ君もこの枝のまろふあるらし
老下枝に山人をくとぶさといへる也一説に杣人の木を伐る跡におなじ木の枝を立
る事をいふともいへり其伐たる木末を折てその株の上にたてゝ山神を祭る也
し今もさやする事あり大殿祭祝詞にも本末をば山神にたむけてとみえたり
ともいへり散木集に
卯の花も神のひもろぎとぶさもたわゝにかゝる也
○万葉集に鳥総立足柄山に舟木伐しといへる鳥総はとぶさ也訓をよみ翼と
立てく飛んとするに足軽くと属けるなり○謡にとぶさにあまる花のとびたち
るは飛さまを略したるにや
とぶひ
日本紀に烽をよめり烽燧ともいへり飛火の義也万葉集に射駒山飛火が
くれにもよんゆ史記の注に飛火曰標とみえたり飛といふ義なり歌に春日
野の飛火の野守とよめり春日の烽は元明紀にみえて今飛火の山といふ鹿野苑
の東にあり又河内高安烽高見烽高見は峠村の北にあり是射駒山なり又出雲隠岐

なく史にみえたり
とふのすがも
目とふは編たる菅薦也といへりよて源通記に七編のことも見えたり書
より一説にかや莚なりといへり菅薦の義也といへりさればふは封字の義なりし今も俵な
どに一のふ二のふなどいへり又節の略にや日本紀の歌に八ふの柴垣ともみえ古事記に
はみふの柴垣やふじまがきもいへり節の意也今も垣を結に幾ふしなど
いへり其薦を出す所は十府といふ陸奥にあり八雲御抄にもみちのくに限りたり但馬
なりといふのすがもやまとよみもしたりとありて又ふは経の義なるべし
△とゑ
俗にとえをくなしといへり十重廿重の義也
△とほる
古事記万葉集よみ日本紀に徹をよめり通をよめり名に融とも
さしすせと二行まてかよりて神代紀に洞達行去もよめり融とよ
み霊異記に通をとほりしてとみえ貫之の歌に蟻通とありて星とほるとよめれ
はとほるよれあらん○融公は嵯峨天皇第八皇子にして貞観四年に左大臣とし
なりませり○禁中におほいとほりといへりあり○通りといふは二條通三條通のこ
とく通途をいふ也伊勢度會郡に通村あり夫木集に行はのとほりの里にはそき

しててとまをり

とほし　古事記万葉集に遠をよめりあるは義をかよハせり後世とほしと云ハ
とほくしも万葉集にみゆとほさくしともみえたり遠之也と注せり○筋とかけ
通を倖に用ふる詞也全浙兵制に遥箕と譯せり近世萬石どほしあり風車也

とほやげ　倭名鈔に遠射又投壷とよめり万葉集に投矢ともいひ神代紀に取矢
還投下ともみえたり

とほびと　仁徳天皇の武内宿祢をさしてのたまへるハよのとほひとまでたまへり
汝こそハ世の長人の意也古事記にはよれなかの意とみえたり世に長き人也

とほざかる　万葉集に遠離とかけり

とほろし　万葉集に河とほろし野をひろみとよめり歌に遠白体あり元名
鈔にとうとほくしろくとなげくひくゞしてたけたかくとほしろき也とみえたり神
代紀に大小之魚をとほしろくひさしなどとも訓せり細鱗の魚をさくなあハ白
く見ゆるをいふなるべし

とほつおや　日本紀に遠祖とかけるハ公羊傳に見えたり又上祖又始祖又本祖などもよめり

○倭名鈔に高祖父をも訓せり文字集略に五世祖とあるハ俗にいふひいおほぢ也

とほつかみ　万葉集にとほつ神祖(カミオヤ)なともみえたり
万葉集に遠神吾大きみと属りも又神代のまゝといつる義也一説に
ほか人と見るべきを見るなる義に人倫に遠きと解するハあしし

とほつあふみ　倭名鈔に遠江とよめりちかつ淡海の義也枕草紙の歌にハとほつあふみとも見え
とほたふみハ通音つあ反たなり又ふ也万葉集にとほたふみともいへり今もとほ
たふみとよめり皆音の転じたる也神名式磐田郡に淡海国玉神社あるも國
に湖あるしるし永正七年に地震洪水の変ありて湖海一に通せしより今ハ名のみ
ありて山ほるとて宝螺の出たるにや今切の渡りといひつくハ兜嘲の詩に左八
海右八湖同一碧長江合沓両波瀾と作れり

とほのみかど　万葉集に見えたる國の朝廷といへり太宰府なとをいへるにて指る文韓
國を指也

とほやまどり　遠山摺延喜式にも見ゆ鮮案抄にもぬるとのすりにハ多く遠山をす
りたるに見ゆ又とほ山ずりとも見えたり後にハとほ山の名あ

つゝ延喜式にみえたり又髻の毛をかへるか中に若髻の毛なかにおしなると遠山毛といへり

とほかみえみため　三種の大祓の辞也江次第に水火神人土に配当せり神世五行の古語といへり家亀卜傳の書考へ看へし又遠神善視賜の義なりといへよしの古語

たえぬはたまえふりまへ文めく

とほきはるかのる　花の香ハ遠く聞ゆるよしよそて近く御れハ貴かしぬに譬へる諺也教民要錄に美不美郷中水親不親故郷人とみえたり拾遺愚草に

とほしれぬ梅のえゝすかもふかひとつらへくに霞かれ

△とま

神代紀倭名鈔に苫をよめり舩にふきかくし宿る物なれはなる成へし舟に篷といひ車に篭といふも同し説文に苫蓋也徐説に編茅也とみゆ○新撰字鏡に蓑をとのよめり蓑楚似桃者と注せり文篠をもよめり

とまる　留字をよめりはまるの轉也とゞまるといふ時はとゞまるといへるにて中臣祓の神留坐を續日本紀よりて神積坐とみえたり○宿泊なるをよむも留の義也

とまり　倭名鈔に泊字をよめり泊るを停むといふ也日本紀に浦津二字をもよめり泊は海路に就ていへり草菴集に

おきつ風吹にまかせて行舟ハ波のよるこそとまりやはする

許梅屋か詩に黄帽貪程夜泊遅とみえたり黄帽ハ黄頭郎なるへし○和名鈔播磨國大輪田泊と出し雍州の百項泊岐州の荷洲泊を引り○琉球泊村乃漂船安永乙未の五月に志州鳥羽浦に着り

とまれかくまれ　ともあれかくもあれ也ともあ反はと也うつほ物語にとすまこのつまれ

とこそえゝう

△とみ　富をよめり田實の義なるへし一説に積也財をつむをいふといへり○万葉集に跡見の岳の辺又跡見すゑおきてといへるハ周礼に迹人とみえ迹之言跡知禽獸処といへる是也○富米といふ姓兼久官軍の將也○鳥見丘城上郡外山村の上方にあり

とみに　頓をとみといふ義とりて訓せしな也といへり物語に多し蟬文の例の如し又速疾の義を持るなりしみハ詞也といへり

とみくさ
　冨草と書り堅塵抄に稲をいふといへりされは相摸家集にも山ふかきとみくさの花といふ詞花集に
あらましくみる倉山に作むよのはあしとぬる世のとみくさの花
とよめるは山にもよめるにあしくれる倉山ハ伊勢外宮の山也○近江多賀社にてかつくと
との木といへり○夫木集にとみ草ハ檜也ともいへり

とみかゝみ
　真名伊勢物語に左見右見とかけり方々みる也

とみの小川
　冨小川とかけり源平盛衰記に法隆寺の前を過るをとてゐるかやと
みの小川と讀て太子斑鳩の宮に住せ給ふ時の事也されと此歌太子傳にみえかく日
本紀には載すまつりひと誤りされは心得かたし法王帝説には巨勢三枝が歌に
せり實を得たるなるへし

とみたまふ
　賑給也五月に行はる政にて米塩勘文なといふ事有貧者に冨
しむる意也○近世神地佛場にて行はるとみといふ事を此によりたる名な
るへし冨伎といふ是也

△とむ
　留字をよむとむる也める反む也○認字をよむハ首万にえゆりしむの略

なるへし

とんぐう
　續日本紀に頓宮とみえ今の氏姓にもいへり太平記にみえ大業雑記に毎両驛
置一宮為停頓之所とみえたり其時に臨んて構るかりやなり

とんじき
　記録に屯食と書り下臈にあたふる飯の名也といへり唐玄宗紀に頓食とみえ通
雅に頓ハ是食也置食之所曰頓といへり物語にとんじきとも書り源氏にはにけく
らひ也今のあるの子と同しといへり○鈍色ハ僧服也海人藻芥に俗の将参あるとある

どんぶり
　江談抄に井ハ異國の似り字也延喜の御時渤海國牒状にあり其後和訓
をとんぶりといひつけたるといへるより實退録に井ハ東敢切以石擊水之声といへり
今の氏姓に井に似るは此字によるなる○舟の名にもよへり○津軽の辺にハ蜻蛉をとんぶり
といふ信濃にてどんぶといふ杜詩の点に水蜻蛉欵々飛の意なるへし○料理の名目にも
よへり洞津のあたりにそれハ太々神楽を勧める後のふるまひをいへり

とんぼかへり
　翻筋斗といふ是也といへり蜻蛉のかへるに喩ていへり児戯にもやくしまかへ
せといふ事ある也或ハ斤斗に似る祖庭事苑に斤斗斫木之具頭重而柄軽用之則斗轉為
此伎者似之といへれり撃劔の術にもとんぼうかへりは水車なといふもこれ也又蹴鞠にも

しつり著聞集にええる小児の戯にまかつりとしつりかへさへの転せる也○手

調の調子なとかく名く隠手あり

△とえ　神代紀に姚をよみえり級長戸辺のとべも同し皇代紀に荒河刀辨苅幡刀辨なと

ええたるも同語なへし又刀自女の中略ともたうめの約言也ともいへり三議一統に小手よ

り始て左より進てまと上帯の後よしめ結合をするとしえゆしめ結合をするとは高組紐

懸るよしいへるなし

とえこし　認来かしと希ふえ之西行法師上賀茂西念寺といふ寺に住し此庭前の

梅をおもしてよめる歌に

とえこし梅さかりぬる我宿をうとやれも人ハとかりよまし

新古今集にハ題しらすて入られたれ今ハあめこかしの梅とて名を伝へたるもの

ふを花肆にとめて梅といふ八重小輪の白梅なり

△とも　共倶與同偕併並両なとをよめり些ももとてまとの義の辞也よて歌に多

し雖の字の義にいつり雖ハ設両之辞と注せし如し万葉集に十方とよめるもその義

なへし○手よらさともいさやてりしもこりぬ源氏にあふうかしともうきしのまれハ

ほまくらふ詞也○公を名みくなとすくよみえるハ公共の義朝も朝廷の義公しかよそしよ

めるなへしといつり上ハあきくよし下ハとをもとよむへしとそ奉をよむ事撰集抄にみえたるも

奉公の義なへし比等倫類群儕なとも通せり○朋友ハ諸共にするものなるをいふよしえ

故人も同し真名伊勢物語にともとするへ人に縁友とおるハ従友の誤写なるへし○人ハ善

悪の友によるといふハ貞観政要に人相與處自然染習すとかいつり菅家の歌に

あかをまくらかとくほくを友もり邪人のなさけも世にありしかし

○知を名にてともとよむハ新知舊知知己なとの義によれりといつり五をよむハ伍に通

わしよめるなへし○日本紀に部をよめり部類なるをいふ義同し○大伴をともとよ

むハ淳和天皇の諱を避るよりおこれり大伴ハ武官也よてうつほ物語にもかくもの

はハともの人えたり○従者をよむハ日本紀にも係もよめり傔仗ハ鎮守府判授の

官人也伴なるよしなるもの上に同し海東諸國記に伴従人としえ全衛兵制に小厮

と譯せり○艫をともいふハ舩の後頭なれハ後の義之艫とよむハ倭名鈔の説にて舳

なつしてあめり小爾雅集韻是也新撰字鏡にハ舳をしも艫とよめり日本紀の点

も同し文選の注説文なとを見也○鞆ハ手面の義にて或ハ一説に大伴氏の祖の

造るなるをもてともやらふしもいひて左よりかけて弦をさくる物なりて鞆清みといひ
てゐるとのしるしなり塩嚢抄よも今世よもまうさるらやよハ皂を用ゆといへり續紀よ
鞆張といふも日本紀よ此字を用ゐたまへるハ據あるべし字彙補よ出せれど義を失へ
りと倭名鈔よハ鞁をよめり切韻よ在臂避弦具也といふ神代紀よ高鞆あり八雲御抄
よたかともといふあり今たかぐらしと訓せるハ柄と謬れるにやといふ武用よハ熊皮神
宝よハ鹿皮のよし延喜式よみえたりされハ征器と神器と異なるべくみえぬ兵庫寮
式にみえたる寸法をもて吉部秘訓の説のごとく制る時ハ征器とみえたり伊勢神
宝の鞆ハ其形雀杯のごとくにて巴を画きしものゝ攝津住吉の神宝もまた同じと
いへり○後世鞆を用ゐるをよりて鉄蓋といふ物を造り左の手面よあつ後又木にて造
るよ木魚の如しといへり○備後國の地名よ鞆あり又鞆明神ましまし神功皇后
の鞆をまつりて神躰とすといへりそれ写し吉部秘訓よ出せると全く同じ○鞆囲
ハ山城乙訓郡にあり○鞊子ハ鞆をいふ○鞆音の事古昏にみえ内よ竹玉を入て皮もて
包む時ハ能なるといへり

ともし　乏字をよめりともしとも云へり字のごとく稀少の義也万葉よ文よ乏しきと木人

ともふくいつるハ希見の義にいふ之佛足跡の歌よもあしのなりしさをしよめり○倭名
鈔よ照射をよめり新撰字鏡よ擬ともしをとよめり達志の説よいへの下にも五
月の比鹿を取んとて火串よ松をさりして待居く鹿のよりくるを射るといへり幽齋
座右の注よとぞし狩ハ鹿の眼よ火の光のあふをまちしよ射也新拾遺集よ
　夏山の夜ハ中をしの森に目をさすもあはせぬれどよめぐしにけり

どもゑ
　江次第に鞆絵と書り鞆の面よ繪かく文也今鼓面よ画しも亦同し○江次第
新嘗會裝束次第に構立舞臺云懸亘帽額不隠鞆繪といへるハ今いふ釘隠しの事也
といへり應永官符よ戈の本にも金銅鞆繪二枚弘一尺一寸四分とみえたり○巴の字をよむハ鞆
繪印巴字なるもハ義訓せし也三巴記よ閬苑白水東南流曲折三迴如巴字故名三巴とみえ
えたり世よころども念といふ説ハ瓦口よ巴文を造るも水の縁をとりて火災を彫も同じく
火災を防ぐ義也曲水の宴よ巴字を書て水よ流すもの菅家江家の詩の序にも四季物語よ
もみえたり説もめぐりくるの義によるなるべし
　かさなるハ巴の字形にたとえて空よめぐりくるのさかりけり
○戦よ巴字よ追まうるといふ事ハ今昔物語よみえたり○天野氏の説よ楽の駄太鼓左

方ハ三頭の左巴右方ハ二頭の右巴也といへり雲雷の古文字より変したる也雲雷と云回とも書
又雷紋を俗よらゐつましといふ雲紋を俗まうつまきといふ巴の字を鞆繪とよむも水の
渦く象なるをは雲形よ用ゐしなるへしといへりけりも鞆も鼓なとも音よるものなるをもて雲
雷より起れるなるへし應劭も詩云酌彼金罍々有畫雲雷之象以金飾之といへり○幕の
紋よ角巴といふ本挨嚢抄よ見えたり○巴大將ハ藤原公經公也家の車よ鞆繪
を畫しより呼るよ○木曽義仲の妾巴女大力なる事人口よ膾炙凡後和田義盛の妾と
なる朝夷三郎を生るといふされと事實合ゑ義仲よ別れし時年二十八木曽七俤組
の一將にて功あり後尼となる越後友松よ居れり終る時九十一歳といへり三條
河原の戰よ重忠追て巴か鎧の袖を捉巴鞭て奮馬騰て袖断といへり朝夷義秀従
利義氏を追て其鎧を捉義氏馬を躍らし湟を踰鎧の袖断も同日の談なり
○巴か嶽ハ吉野大臺か原よあり巴か淵ハ其下流なり○ともし鞆繪ハ鞆のゑを畫か
けるなるへし

ともや　万葉集の得物矢をよめり將矢といふとて新六帖よもよめりされともさ
つやとよむへきにて

ともす　燃ともよめり留る事也ともす又む神代紀よ擧ともすとよめり

ともだち　伊勢物語よ見え友共の轉せるなり友共ハ万葉集よ見えたり日本紀よ同
伴訓せり

ともの緒　日本紀よ部とよめり舊事紀よ伴領とみえ古事記よ伴緒とみえ祝詞
式よ伴男とみえ万葉集よ伴雄とみえたり部類の多き人をいふ也一つの緒よ數の玉
を貫くよ譬へて其の緒といふなるへしといへり男ハ借字にて女神もますへしされハ凡ての
人を何某の貫屬といふ殿上の貫首といふ貫も意通へり伴緒と書を正しとす

ともがき　神代紀よ朋友をよめり共籬の義相共よ扶持する意又友か君の略也

ともろ

ともしび　燈火といふ靈異記よ燭もよめり万葉集よ留火とみえたり○竹のと
もしびハ佛名よよめり○燈ともえんとて光をまたしといふハ列子よ燈將滅者必
大明とみえたり○女媧氏石を煉て天を補ひしといふハ石を敲きて火を取昏黒
の變を通し天の及さる所を補ひし是後世よ膏を焚く居よ灯くの始なり
といへり梵書よ日月燈光佛あり

ともがら　輩又衆屬類黨類徒黨同伴者をよめり朋族の義也霊異記に儕新撰字鏡に儕をよめり○俗語に輩を侮りし又毎にしもいへり又倫ハ等也といふ也又字彙に鳳飛群鳥従以万数故借為朋黨字とみえて鳳鳥亦鵬と名く又族もよめり

ともかゝ　禮記注に類也といへり又曹をよめり

ともかゞみ　友鏡の義也袖中抄に我髪又ハ人の髪の白きと雪とを合せたるなり

貫之集に

黒髪と雪との中のうきみれば友鏡をもつらしとぞおもふ

ともかくも　神代紀に取捨をよめり外も此ものの義なるべし万葉集に左右をよめり○土左によしかくまれかくまれとハとにもかくにもあれかくもあれかし又まゝ也この伊豫などにとかくと云ハ轉語也

ともすれバ　ともかくとより出たる語也やゝともすれバの意也徒然草にもあるみくまれしとみえたり

ともまつゆき　友待雪の義也雪のふりてあとの又ふらんまでハ已にふりし雪の消ぬをいふ詩人玉屑に残雪の事を待伴とみえたり唐の俗語とみえたり

歌ハ家持集にもみえ源氏にも友まつべかりきえ残りたる雪とみえたり

とものぞめき　万葉集に友騒とみえたり友共ぞめきさわぐ意也

とものみやつこ　日本紀に伴造とみえたり国造に對していへり八十伴緒の職掌ある部類をすべしむる任をいへるよし孝徳紀に若憂許之人有伴造者其伴造先勘當而奏せしとみえたり殿守のとものみやつこよめるハ女異なるみの部名とみえたり

△とや　歌に袖ぬらしけりやとそれよりハやのまれハ疑ひ捨るてにをはなりそとがめてにハといふてにをはとも云同し○雞塒をよめる鳥の義也○鷹の毛をかへるをもとやといふとやごもりともやがへりとや出のたかなどよめり○とやの野伊賀にあり万葉集に見ゆ

とやま　外山とは端なる山をいふの義としてとふ處へし戸の意にもみしもあり古事記に戸山津見神あり○鴨の長明が幽居せし日野の外山也

かゝる身ハ車ひくかのぬしなれともちひさき石に名をも残りけり

逍遥院殿の歌方丈石をよめり○とやま此處てをとむるなんの歌ハ後拾遺集にうちのおかひまくきてふくの家に人〻酒たうべて歌よみ侍りけるに遥に山の桜をみてといふ事をよめるとあり外山のもみぢされる字と〻ハ遥かにといふ題にかなひて條然とみゆ

より自然に雲ばかりに心の浮るゝ如く眺望せる体なるべし

探むるにまぎるれハ雲霧峯のと尾のと立かくしけく

擬いなば峠よりしも足引の山のかひより雨ふりしくを

是をばとりてよみけるなるべし○匡房卿ハ叙正二位したれども後拾遺集此歌にハ

大江匡房朝臣とみえたり其ハ四位なりしほどにて権中納言といふ千載集によりて後人ある

せるなるべし○外山の城ハ越中にあり土岐光明外山城称を

△とゆけ　高野天皇紀の詔伊勢五部書に止由氣とみえたるハ古事記に登由

宇氣神と書し舊事紀に豊受神と云せるをよらけのよう反也よて千五

百番歌合にハとようけとよみたり今とよみけるも中にまれり外宮の御名也○大殿

祭祝詞に屋船豊宇気姫命注に是稲靈也俗詞宇賀能美多麻といへる此事

日本紀に記さぬハ大疑し

△とよ　豊をよめり富世の義といへり諱訓抄に茂もよめり葦原中國なと

豊字を冠らせしハ称美の詞也大泊瀬とも豊泊瀬ともいふが如し

とよむ　日本紀に鸞駭をよみ万葉集に響又動をよめり豊より出る詞

なるゝしもとよむ山下とよみ行水なと皆ひゞくといふ也

とようや　豊受の宮をいふ○とようや人ハ外宮の神人也○とようや川ハ今

いふ宮川也万葉集に度會の大川とよミし文斎王の宮川ともいへり豊川ハ

宮城の西北に廻れる川をいふ也

とよもし　神代紀に扇をよめり万葉集にもはだとよもしとみえたり

とす反也又とよむるといふに令響と書り後拾遺集に

白波の立ぬりしたよるふかやるとよらの里のやよらなりし

とよれあり　○新点に天に扇て國に扇てとよめり

日本紀に宴會宴竟又樂府古事記内裏式に豊樂をよめり

豊明の義也夜を日にはらて酒宴するをとて名くる也よて大嘗會なとの歌

に多くよめり元日宴といふ題に顕昭

む月立つ今のあそびやとよしれの豊明のとしそえるらん

とよはたぐも　万葉集に豊旗雲と書り雲の旗に似たるをいふといへり豊

ハ大の義文徳實録に有白雲自艮至坤時人謂之旗雲とみえたり袖中

秋さは海雲のようなり

とよおかひめ

河海抄は五節の舞姫也　神楽歌にも豊岡姫と書り天照大神をまをすといへり一説に豊受姫をよしと訛るを

つしとらへうけおか音通へり

とよさかのほる

　祝詞式に朝日の豊栄登と見えたり古事記の歌に朝日の笑み

さかえきてといへるもし　逆の字を昏るは借字也金葉集に

くもりなく豊坂のほる朝日には君をつかへん万代のまえ

△とら

　虎をとよめるは暦注に武をとよむといへる人をとるの義也一説に楚人虎を

於菟といふ於は発声なれは倭人も同音なるへしやからは多くこえていふ辞也

といへり或は高麗の語也ともいへり○虎を友として術を学ひける事は齊明紀

に見えたり○万葉集に敵見える虎かほゆるとも見え六百番歌合に

かくしの虎ふすを野への入ようもましふ道路の末そあやふき

新千載集釋教に

竹乃葉にかけし衣のむかしには虎ふす野へもむつましきかな

是は摩訶薩埵園中に於て虎の子を産して飢たるを見て衣を脱竹の枝に掛て虎

に身をあたへたる故事金光明経に見えたり拾遺集にもよめり○酉陽雑俎に虎殺人

能令死起自解衣方食之金壁故事に欲

死留皮人死留名と見えたり○満刺加国より黒虎あり近さは蝦夷よりも出し

といふ○虎嘯而風起の語は孝経の序に見えたり○大磯の虎御前とよめり諸

國修行の時熊野岩手村に死す車塚ありと大著聞集にみえ参河のとら

里は本にふ村といひし近年孝女としてありしより呼なせり○とら茶筅とて

寅日を縁日とするは山城葛野の太秦薬師の像は長和三年甲寅五月甲寅日安

置したるより　日本紀略にみえたり

どら

　今昔物語に度羅鳴の事を載て人の中に性あるくして人に似ざるん

ものに物とくらふ者をは度羅人といふと見えたり續日本紀に度羅樂ある度

羅は耽羅と同しこなやかには朝鮮に属し濟州といへり延喜式に肥後耽羅

鰒令義解に耽羅鯆とあり○鉦といふは銅鑼の音也俗に右ならふ人の事をと

らうけくらふは度羅と鉦にあてていへるなるへし

とらす　人に物をあたふるをいふ令取の義也源氏伊勢物語にみえたる匡房の歌
に
　色人にならはれ今はかうえんも秋くさくさはしくれはありけを
とらふ　捕をよめりあらふ反る也又攫ぬよめり霊異記には繫ぬよめり又因
ぬともよめりてうしよめりては反ら也
とらかを　令盪の義文選に淘ぬよめり鎔をとよむべし○物にとらかされたるなといふ
鬼物にとりつかるゝ義也
とらのかは　左傳に皐比とみえ鋪皮を皐席といふ續日本紀には大虫皮とみえ
たり大虫は虎の俗称也蝦夷よりも出せり○檜垣女集に虎の皮尻鞘を顯に
て肥後守のよませしに
　うへかくしやくたるからは川の尻さやけりしぬは浪のにて寄り
とらのかしら　紫式部日記皇子誕生の條に虎の頭宮の内侍とりて御さきに
まゐるとみえたり本草に虎頭骨作枕辟惡夢魘置戸上辟鬼初生小兒煎
湯浴之辟惡氣去瘡疥驚癇鬼疰長大無病とみえたるによるなるべし

△とり　をとらふ莵集の義にや○俗にとりはくふしもどうするらしらふは骨のあく
まらさつく赤き肉のあるをとりしらうを濁り呼り○雞は平生人家に在ても
てとりの名をきるまでり古の歌に多くよめるは天宝遺事の名妓劉国容か歡寢方
濃恨雞声之断愛といへる意也○万葉におもしろしと鳥といふは雉の事也といへるは仁
徳天皇の始て鷹をあはせたまふにまづ雉をとりたるによる也○体源抄に加陵頻古
樂中曲童舞一名鳥一名聖明樂とみえたり通典に高昌献聖明樂とみえ酔郷
日月に太常樂といふ本胡樂といへり○鳥佛師は日本紀に鞍作鳥為造佛之工と
いへる者にて尾張國建中寺の阿弥陀は尾張大納言家の寄附にして鳥の作と傳
ふ
とりゐ　和名鈔に雞栖をよめり鳥居の義也神社に必らず鳥居あるは神代紀の
長鳴鳥の故事より起れり衡門に近し又酉陽雑俎に東門鶏棲木ていふもみえ
たり華表とするはあやまれり○又古事記の歌にもほづえは鳥居かれしとあるはとゞく
より諸鳥の宮社を避んためにもありぬべし○神宮の鳥居は異なり應安遷宮記に
東西北三方各有鳥居とみえ文保記に弓箭兵仗太刀男女念珠本尊持経禁入第二鳥

居せり又云第三の鳥居の内を内院といひ外を外院といふ中右記なとにみえたる是
也鳥居の制に二柱嶋木黒木三輪總合臺坐䉛剌等の名あり黒木ハ皮付きの木
之三輪ハ二柱の左右に一段低き鳥居あり扉ありて門とす是を三光の鳥居とす總合
ハ近江山王の鳥居是也笠木の上に又三角の笠木あり四足といふもこれなし之攝津
住吉石鳥居に二柱四角なるあり○延喜式を考れば御腰輿腰車にも鳥居あり
今京師にて送葬の時これに載するも鳥居あり世より庶人にも移でたるなるへし
禁掖秘抄に禁中に鳥居障子あり類聚雜要抄に人家にも鳥居と名くるものあ
りと○明應山車記に御葬場殿に白木の鳥居を作る事なと也大和の國ハ死人を焼る
る所に必ずなる居立より伊勢神宮長官の墓所に鳥居を建る東寺にある慧果の廟
記に鳥居あり是ハ華表を摸せるなるへし紀州の墓所にハ皆鳥居あり○北山抄に鳥居
にハ一基とも也○鳥居強右衛門天正の比長篠戰に勝頼に答るの數語晋の解揚が
楚の莊王に應ると數千歳の下一口に出るがごとく其英氣凜々たる見つへし獻の言
志あるにくせしハ欽明紀の伊企儺もすこく類せり○鳥居が原ハ日向國檍が原の邊
にありて皇后の故趾といひ傳へたり鳥居嶺ハ信州にあり岐蘇の御嶽の鳥居をいひて

らに在しといひ近江の鳥居本も多賀明神の鳥居ここに在しといへり鳥居氏ハ熊野
別當の後なり○鳥居ハ本笠木を指ていふ衣桁になる居あり笠木也

とりめ　倭名抄に雀盲をよめり暮方よりみえぬ也

とりえ　取得の義突訓徃來に招据有胥之族とみえたり抄にとりえあると
ハ藝ありて用に立ものをいへり孟子の不胥をとりところなきとよめる義
通へり○諺にくさるなれどもとりえといへるハ朽索にも執柄あるといふ義なるも
て愚者の一得を喩ふるなるへし

とりで　捕手也把勢といへり拳法を捕縛も同しよる手の類に使手あり本
邦にてハ陳元贇より傳ふといへり城の近見に小城を築をもいふ取出の義也○砦
をよむハ字典に壘也通作柴塞といへる意也○器物にいふハ鈕也とりてともいへり

とりこ　虜又擒又俘をよめり捕籠の義なるへし○和名鈔に鳥籠をよめり
今とりかごといへり○枕草紙にとりこともなくさげるといふハ素子をいふといへり兩居
友いとりむともみえたり

とりべ　新撰字鏡に鷙をよめり又こもたかともよめり鈍鵈なとをもまかれしといふ鳩ら

し　本朝式に鵄をとびとよめる同物なるにや○ならは京の東に鳥戸寺あり今廃を阿弥陀か峯是なり

とりばみ
宇治拾遺に大饗をとりはみといふものとおもひて入きして大饗のおろし米とて給仕する掃勤の者ともの食なるをいへり鳥食の義なるへし今も穫かしの時の焼米を農家に鳥の口といへるに同し

とりのこ
神代紀に雛子をよめり卵をいふ○鳥の子を十つ十をかさぬともの歌伊勢物語にみえて六帖に本あり蜻蛉日記に鳥の子かさねて来る事あり説苑に出たり○鳥の子色といふも白色のうすき色をいふ也○とりのこかみといふも雛卵皮に似たるをもて名とす紙譜に閩人以嫩竹為紙といふ是也

とりがなく
吾嬬の枕辞にいへるは万葉集にも雛は夜の明るを告なく故に明といひかけたるといへり一説に神楽歌に雛はかけろと鳴ぬなり起よ我かとのつま人もこそみれといへり此義なるへしといへり

とりだすき
綾の紋にいふ鳥襷と書り指貫の紋にいふ後鳥羽院御抄に凡鳥襷は尋常浮文也綾并に固文不可然とみえたり両鳥不相離の義を取也伊勢皇大神宮称宜譜図帳に天見通命木綿葛手鳥繦懸とみえたり羽かひの体をいふ也一説に今は屏風の裏の雀是なりといへり或説に屏風の雀形は比翼の鳥をいふ風鳥也ともいへり以尾能飛ともみえたり

とりのあと
蒼頡か鳥跡をみて文字を造りたるよしいへる呂氏春秋にみえたり○歌によめりし千鳥とよむは大己貴命の故事なるよし古記にみえたり顕昭は千鳥のあとをよみそめたるやうにてよむは歌のならひといへり○源氏にあやしき鳥の跡ならぬやうなれるとかいへるは手跡のあしきをいふ也

とりえる
執障の義分解解動なるを譯せり古事記五百引石取塞其室戸とみえたり

とりあはせ
和名鈔に闘雞をとりあはせと訓り古記に天慶元年三月四日十番鶏闘ありともみえたり○口語に取合の義とす

とりかへ
菅家万葉集に大虚はとりかへしとよめるは取かへしかたきをいふ意也といへり○徒然草にとりかへさぬ齢なりといへり古歌に

とりかへす物にもかなや世中をありしなからの我身とおもはん

徒然草に見えたり不取敢の義也俗にとりあへすといふも同し菅家の

とりあへず

歌も同し大和物語の歌にもとりあへすと詠るをも見ゆ

あはしてやとりもあへすをみやらいはたしくらさかりさ心ちこそすれ

とりしで

日本紀に懸ぬさにあり取垂と古事記に見えたるに据也万葉集に木

綿とりしてとよめる歌二首あり皇極紀に懸掛木綿とおもへり

とりのそらね

雞の虚音也孟嘗君函谷関にはかりし故事によりて清少納言

のよみそめし詞也後拾遺集に大納言行成物語なとして侍りけるに内の御

物忌にこもれはとていそきかへりてつとめて鳥の声にもよほされてといひおこ

せ侍りけれは夜ふかゝりける鳥の声は函谷関の事にやといひつかはしたりけるを立か

へりこれは逢坂の関に侍るとあれはよみ侍りけるとあれは歌にてもかは夜半の心を歌

にいふ也後撰集に

天の戸を明ぬくといひなしくそらなける鳥の声かな

○契仲云老の後四國の辺におちふれたるか續千載集に老の後ことそめて

侍りける歌人の事てまいりたりけれは是は都の辺にこもりおけ

るなるへし紫日記にいへる様又枕草紙にとりわき歌をもしおもひよかりける様と文

にかきては是をすこし奇也かにたくひなき一体歌云ることなとそといふへかり

き

とりわき

時をえりて奏する者をいふ之後小松院御製に

このはるやとりわきも告こえて我しれるくあかつきぬ哉

朗詠集に雞人暁唱聲驚明王之眠といへる意なりといへり

とりくびのたち

螺鈿剱の柄首に鵄鷲の頭を造りくはへるなり鷹飼所帯の

剱なりと江家次第に見えたり

△とる

取採等の字をよめり秉も同し留の義にやとりもれるの行そてなく

とりけり俗語かとり用る事をもとりのけるなとも唯とるといへりたとへは是とりのまゝし

の名も執盞の義なるを俗には是をおかれとるといふ之○日本紀に員をよめり

古今集に先名とりてはなとよめる是也○雞林類事に方言凡呼取物皆曰都

囉と見えたり筆をとるは右筆燭をとるは秉燭薪をとるは采蜂をとるは掇鈴

とつかは把弓をとるは手刀をとるは握柯をとるは執也霊異記に擒もよめり又取娶と同し

△とゝる　太平記に閖蕩なとしるされたるはあしきあるなるへしゝと蕩りる意也ろけ反音也

△どろ　泥をどろといふ土と水のとろけたるをいふ備後福山にてたづんといふ○人を罵の辞にもいふ世説に酔て泥の如しといへる意也楊升菴集に俗謂柔言索物曰泥ともいへり○類聚國史に山城のみどろ池を泥滓池と書り○出羽に長瀞あり瀞は俗の造字也

△とろゝ　蕩をよめり解る也ろは助の辞くとろゝ汁は今蕩也自他の異也○とろくとろふ辞も同し伊勢神宮の道にひしこと名け或は矓目をとろくめと譯せり○人の俗語にとろしといふも同義なるへし和泉大鳥郡に取石池あり万葉集に妹かてを取石池の浪間より鳥の音けに鳴秋をめくらし續日本紀に車駕石頓宮和泉和泉郡舞村に故址あり○出羽にて切々をとろふ事をとろよのといふ

とろかし　光棍ならふでるかしの轉訛で光かしは棍也といへり一説には土呂坊の永祿五年参河土呂の一向宗黨を結んて叛く御家人とせしも多く黨せし是より起りる俗語なりといへり○遠江にて酒狂人をいへり

△ととな　船よらふ万葉集に門渡とよめり門は海の門也海門水門なとの門に同し又疾渡る意にて万葉集にもやらで船よらふ赤人集にやくらぐ舩にもあり

△どゐ　土堰と書り或は土圍也といへり城の土居は垣也○姓氏に土井といふも是なるへし土居は延喜式にとえるはちねしとみえり伊豫にてとゐと唱へ河野の一族所々に一かまへたるを称せりよて氏ともも土居得能なとあへてり土居得能は南朝の始に義を唱て長門の探題を攻走らしたり○神宮にとゐとゐ事あり燈油を誤て呼り神事に大床の下にて燈をともす物忌父の職也

とゐきん　箏の十三絃中の三絃をいふの名也和名鈔に斗為巾とみえたり

○きてのをとらふ事もみえたり

△とゑ

△とお

和訓棊前編十八終